

4月2日、靖国神社の桜は英霊の御心に副って真盛り。遺族55人、来賓及び会員314人が参列して厳粛且つ盛大に行はれた。

往時を偲び特攻烈士の御魂に恭しく拝礼すれば何か安堵したような気持ちになる。あれから五十余年、赴った人はいつまでも若いのに、きざしを登るとき躓きそうになる我が身に、遠いへだたりを感じる。

後に続くを信ずと言はれた御魂は、何と思召め給うだらうか、年寄り共が集って仰々しく祭事をやるよりも、後継者に、あの頃お互に抱いていた気持ちを、しかと植えつけることが緊要だと仰せられるのではないか。

折しも桜花は爛漫、靖国の庭の梢で咲いて会おうと、唱った友の御魂は、奥殿から抜け出して、あの枝に籠っているのか、樹の下に白鳩群がる。



報 特 攻 会
 平成11年5月

第39号

〒105-0001 東京都港区
 虎ノ門3-6-8 第6森ビル
 財団法人 特攻隊戦没者
 慰霊平和祈念協会
 電話 03(3432)1090

編集人 田中賢一
 発行人 木村元正

目次

| | | | |
|-------------|----|--------------|----|
| 特攻隊合同追悼式 | 1 | 忘れがたい人たち 回天① | 16 |
| 生残り特攻隊員の心境③ | 2 | 青年勉強会における講話 | 19 |
| 建国記念日奉祝中央式典 | 13 | 図書紹介 | 26 |
| 特攻勇士の像完成 | 14 | 平成10年度収支計算書 | 27 |
| 遺族探しに御協力お願い | 15 | 平成10年度事業報告 | 28 |

献吟

第二十振式隊 穴沢利夫
 粉とくたく身にはあれどもわが魂は
 天翔けりつつ み国まもらむ

回天金剛隊 石川誠三
 思はじと思へどとかく思ひいづ
 故郷の母よ さやけくおはせ



鋒田を発つ鉄心隊 先頭 松井中尉

戦没特攻隊員鎮魂歌

- 一、天地を支える正大の 氣宇鐘りて神州に
秀麗仰ぐ富士の峰 万朶棚引く櫻花
- 二、侵す夷狄の猛くして 死もて護らん大八州
神風起すか敵艦を 屠りしをのこ特攻隊
- 三、菊水の旗いくたびか 我が陣頭に翻り
天馳けり行き波潜り わだつみ揺がす回天譜
- 四、抜山蓋世の勇あるも 時に利あらず離往かず
湧き立つ雲は続けども 落日かへす術はなし
- 五、悲願空しく国敗れ 残りしものは唯山河
ますらをの歌と絶えたり 祖霊何処に在すらん
- 六、後に続くを信ずると 莞爾と征きし友垣の
遺せし言葉我が胸に 消ゆることなく半世紀
- 七、お国の為といふことの 絶えて久しき現世に
我等思いわずらいて 遊魂如何に鎮めんや
- 八、弥生の空に靖国の 宮居に詣でる人々の
額突く姿まごころを みそなわせあれ祭神

〔対談〕

生き残り特攻隊員の心境

回天搭乗員

語り手 小灘利春

(在八丈島第2回天隊隊長、兵学校72期)

河崎春美

(在高知県須崎第23突撃隊、予科練甲13期)

聞き手

海上自衛隊横須賀地方総監部
三等海佐 磯部 博

一等海尉 石本一夫

記事作成 菅原道照

全般企画 田中賢一

実施 2月3日

横須賀地方総監部内

回天とは

磯部 初めに回天という言葉は以前から聞いたことがあります、どういう目的の為に造られた兵器なのか、又回天という名前の由来が私達にはよく判らないのですが。

小灘 回天を創った方は黒木博司という海軍機関学校出身の士官で、特殊潜航艇(特潜)の艇長でしたが、小さな魚雷二本だけで行動範囲が狭い特潜では、十分な戦果は挙げられない、広い海域で積極的に戦果を挙げるには、

魚雷に人が乗込んで行こうという発想で、93式魚雷を活用して人が操縦して行く。体当りになります、自らの命と引換えに敵艦船を沈めるとい

うことで開発されたものです。回天の名は明治維

新の時に勤王の志士が使った言葉ですが、狂瀾を既倒に廻らす。即ち衰えた勢いを再び昔の様に盛返すという意味です。

磯部 成る程、そうしますと何か書物に出て来るといよりは、頹勢を挽回するという意味合いで考えられた言葉なんでしょうか。

河崎 太平記からという話もあります。厳密な意味での出典とは言えないかも知れませんが。明治維新の時に良く使われて、幕府の軍艦にも回天という名ものがありました。函館で自ら擲座し砲台となって最後まで奮戦しました。回天という言葉そのものが良かったのではないのでしょうか。

石本 私は詳しくはないのですが、

江田島の参考館に海龍が置いてありますが、ああいうのを総称して回天と呼んだのでしょうか。それとも回天という型があったのでしょうか。

小灘 回天という特定の兵器がありました。海龍というのも、特潜の兄弟分のイメージがあります。黒木さん達ですが、特潜では駄目だということで開発したものですから、回天はむしろ特潜に叛旗を翻したとも言えます。

特潜は元来、潜水艦を小さくしたもので、魚雷を発射して帰って来るとい

あります。

磯部 初めから帰還することが考えられていませんからね。

小灘 帰って来ようの無い兵器です。

磯部 破壊能力は人が乗る魚雷ですから可成り大きい。当然炸薬も多い。相当な破壊力だったのでしょ。

小灘 普通の魚雷は、外国でも精々300kg位です。93式魚雷は初め500kg、後に800kgに増量されたものが出ています。それが回天では16屯。後で1.55屯になりましたが、設計当初は16屯で、炸薬量が格段に違います。

磯部 凄い破壊力ですね。例えば空母なんかは一発でしょうね。

小灘 勿論そうです。戦艦も一発の筈だったでしょう。

河崎 当時は計算上では10万屯迄は撃沈出来ると言われていました。現実には10万屯の船は存在していません。

磯部 あっそうですね。

河崎 武蔵と大和が最大で7万8千屯ですから、当時の船は総べて一発で沈められる計算だったので。

小灘 戦艦でも真中に当って、特に火薬庫付近に命中すれば、間違いなく沈められたでしょう。

磯部 速力等から見ると、太平洋の真中で会敵するのではなく、相手の泊地へ行って攻撃するのが前提だったの



ですか。

小灘 初めから二つの使い方が考えられていて、最初の段階では泊地に入する方式が取られました。当初から大型魚雷の発想で洋上攻撃も頭の中に取りました。

然し、泊地攻撃のほうが成功する確率は高いであろうということで、初めの内は上層部が固執した面があります。

河崎 要するに魚雷に乗って突込むという行為そのものが初めてでしょう。初めての兵器ですから使用法が決っていない。一番やり易いのが停泊艦攻撃で、停っている船にぶつかるといふことを考えた。それが回数を重ねると港湾警備が厳しくなると、航行艦船襲撃に移行していったのです。

回天の性能

磯部 速力ほどの位でした。

河崎 30節です。

磯部 それでしたら十分出来ますね。

河崎 30節であれば可成り追付けますから。

磯部 当時、所謂ホーミング魚雷と言いますか、ホーミング能力は無く直進だけです。

河崎 それを人間がホーミングした訳です。ホーミング魚雷の場合はどうなのか判りませんが、回天の場合人間が乗っているから一撃では終わらないの

です。

磯部 失敗してもやり直しが出来る。

小灘 繰返しが効くというのが、ホーミング魚雷を超える一番のメリットです。

磯部 成る程、今のホーミング魚雷より遙かに……。

河崎 ええ、突入地点は大体目標から300〜500米位で、そこから突込みますから30秒位で走行線を突破します。ストップウォッチを押していますから、30秒経ってガンと来なかったら、その俣通り抜けて、同じ距離を進んで反転浮上すれば、初めに突進を始めた態勢とは逆方向に占位して、反復攻撃がやれる訳です。

磯部 凄い構想ですね。それに人間を使うというのが凄まじいですね。

河崎 人間が乗らなければ、最後迄やれないでしょう。ホーミングの如きものは当時無かったのだから。

回天の操縦法

磯部 先程も出ましたが、回天の操縦方法等比較的短時間に習得出来る構造だったのでしょうか。

小灘 魚雷は自動操縦ですから操縦自体はそんなに難しくありません。但し特異な要素がありそう簡単でもない。要点を掴めば皆やれたと思います。特に泊地攻撃はさほど難しくはなかった

と思います。

磯部 一応潜水艦ですから浮上して敵状を見て潜って行きますね。

小灘 潜航中の潜水艦の甲板上から発進して、指定された速力と時間で走って浮上すると、泊地攻撃の場合は入口の前に出る様に計算されていますか？

そこで潜望鏡で観察し、修正して進入します。

磯部 速力は先程30節ということで、潜航時間は三回襲撃を繰返すだけの燃料というか……。

河崎 要するに30節全速で走ると2万3千米です。航続距離は、12節では7万8千米走れます。湾口到達迄は20節が精一杯でしょう。

小灘 泊地接近中は12節位で行くので相当余裕があります。それだけ酸素が残りますから、泊地の水道も矢張り12節位で入って行くでしょう。突入の時は30節に上げます。航行中の艦船襲撃の場合は、近接は20節位で、良い位置に着いたら30節に上げます。普通の攻撃距離であれば数回反覆攻撃出来るだけの十分な燃料はあります。

磯部 潜水艦は姿勢制御が非常に難しいと聞いたのですが、一人で弁を開閉したりし乍ら浮上乃至潜航するので

小灘 大体イーブン・トリムになる

様に出来ていきますから、走ると酸素を消費する分軽くなって行きます。前後

のバラストタンクに略々均等に海水を入れて行けば、浮力の調整は出来ます。そんなに問題はありませんでした。

磯部 人間の感覚で調整するのですか。

河崎 いや計器です。酸素の消費量で。

磯部 そのバランスは。

河崎 バランスは前のタンクに何立、後に何立入れてと。タンクは前に三つ後に二つありましたが、ベントがあったキングストン弁との操作で、何番タンクにどれだけ入ってということ、水深の両方でやります。

磯部 下手するとボコッと浮きますね。又逆にすつと沈んでしまうことあるでしょう。

河崎 だから常に多少のマイナス浮力を持って行く様にすると、運動性が良い。

磯部 そうすると、後は推力でもって潜舵で姿勢制御し乍ら……。

小灘 回天は可成り良く出来ていて、スピードがあれば舵は良く効きました。磯部 そう言った意味では、大きな潜水艦よりはむしろ操縦性は良い訳です。

小灘 それは言えます。殆ど浮力の

調整だけですから、予め計画表を用意してそれに従って注水していれば、大体うまく行きます。

磯部 マイナス浮力にしておけばよいですね。

小灘 はい。余りプラスだと潜る時に水煙が上って具合が悪い。プラスマインゼロか、多少マイナスにしておくと運動性は非常に良かった。浮上しても相当のスピードで走ります。5〜8節位で舵は良く効きました。

河崎 おつかる時の角度、撃角、それを60度以上に持って行けと言われました。そうでないと滑るのです。

磯部 ああそうですか。特に戦艦は装甲が厚いから難しいですね。

河崎 それを60度以上に持って行くと。まともにおつからないと駄目ということですね。

磯部 私は本当は飛行機乗りなので。戦後出来た戦術航空士です。魚雷の撃ち方色々研究して来ましたが、うまく当てることは難しい。今使っている魚雷は左廻りなので、右15度測り下前に落せという。うまく電池が作動して命中するのが中々難しい。30節で魚雷を感じて回避する時にも20節位は出ますから、それに命中させるのは物凄く難しいですね。

河崎 それに反航態勢がありますか

ら。一番辛かったのは、潜望鏡が1米しかなかったことです。

磯部 艇体そのものが小さいから。**河崎** 眼高1米で視達距離といったら知れています。3千米位でしょう。

磯部 直ぐ水平線ですね。

河崎 視達距離が短い。それで撃角を60度以上に持って行くのに、敵の方位角が120度であるのか、80度であるのかというのが判りにくい。抑々3千米であるということは先ずありません。

潜水艦から発進して行く時は、幾ら遠くても千5百、千米以内で浮上する様に指令を出します。

小灘 潜水艦では目標の前進方向、速度等を掴んでいますから、艦長は、何度方向、何節で何分間潜って進めと指示を出します。浮上するところいく態勢になるから、後はお前の方で持って行けとなります。

磯部 成る程、そうですか。

隊員の募集

磯部 当時は国の為ということだ覚悟は出来ていたでしょうから、多くの方が志願されたと思うのですが、隊員の選抜要領と言いますか、どの様にして選考されたのですか。

小灘 予備士官や予科練出身者の場合は純然たる募集です。志願者の中から更に厳選して搭乗員を決めています。

兵学校出身者の場合、こういう兵器を使うべきだという意見を出した人は、搭乗員に採用されています。それ以外

は兵学校出身者は指名です。転勤命令で来ます。後になると、行くかどうか質された人もいますが、我々の場合、志願するか否かなど誰も聞いてくれませんでした。

磯部 一方的に指名ですか。

小灘 いきなり指名でした。我々はこの様な大きな働きが出来る配置は光栄です。若し聞かれば当然志願します。指名されたのは適任と認められた証明であると、今でも誇りに思っています。

訓練状況

石本 戦争中ということで訓練時間に余裕が無かったと思いますが、技量的に或いは自分が之に乗って突込んで行くのだという意識面とで、訓練時間は足りなかったのか、それとも十分だったのでしょうか。或る程度納得出来る処迄到達したのでしょうか。

小灘 人員に対して回天の数が少ないし、整備に手間が掛かるので、例え望んでも訓練回数をふやせませんから、速成の域を出ません。ですが自分で訓練し、他人の訓練を見て、毎晩の研究会で激しく討論研究しましたから、向上は案外早かったと思います。

河崎 その補充として潜水学校にシ

ミュレーションの訓練を受けに行きました。

小灘 机上襲撃の訓練装置がありませんからそれを使い、大津島にはその簡単な装置が設置されていて、随時腕を磨くことが出来ました。航行艦襲撃は色々なケースがありますから、幾ら訓練をしてもきりがありません。一瞬の観測で判断を誤れば命中しないのですから、訓練していてもいざその場でどうなるか、凡ゆる場合に備えて訓練を重ねる程良いのですが、自他共に一応の自信が持てる程度になって出撃して行ったと思います。

河崎 乗るのは大体20回から25回です。一時間として延25時間、最初は30〜40分位ですから先ず20時間位でしょう。その程度で卒業レベルに達しなければ、これは出撃させてくれません。

磯部 技量があるレベルに達するまで……。

河崎 そうなると次は中々乗せてくれないのです。だから腕の磨き様がな

いのです。後の者が先に出て行く場合もあつたりして。**小灘** 或る程度適性を見て人選して

生き、何の為に死ぬのかという起承転結の筋道がきました。ですから怖いものも無いし欲しいものも無い。

磯部 矢張り同じですね。それ程敗戦の色は濃かった。

小灘 昭和19年9月頃は敗戦という意識ではなく、又降服する等夢にも思ってもいません。然しこの俣とことん迄戦えばいずれ本土が戦場になるであろうし、そうなれば日本国民は助からない。滅亡乃至はそれに近い状態に追込まれるであろうと予測しました。自分の体を弾丸に代えてでも相手の船を沈めなければ、その通りの事態になってしまいます。我々は己の命・能力を活かす最良の手段を与えられたのだと思えました。

磯部 軍人ですから敗戦ということば考えないとしても、劣勢であるということは判って居られた。

小灘 はい、昭和18年後半には誰しも心の中ではそう思っていたと思います。この俣では駄目だということですが。然し戦争を止めるという考えは毛頭ありませんでした。例えば桶狭間の合戦で、今川義元の大軍を信長は僅かな兵力でやっつけていますから、そういう方法が無い訳ではあるまい。一人一人が最大限の能力を発揮して戦わなければならぬ、という気持ちでした。そ

ういう戦いが出来るかどうか。その出来る機会を回天という空前絶後の兵器によって与えられたという思いですね。確かにうまく使えば相当の働きが出来たと今でも思っています。

出撃時の心境

磯部 出撃を待つ間の心境と言いますか、私達はそういう極限に迄行ったことが無いので判らないのですが、どんな心境だったのでしょうか。

小灘 少しでも早く出たいという気持ちで一杯でした。出れば確実に何日か後に死ぬのですが、それが出たくて出たくて。皆そうだった様ですね。私は搭乗員の分隊長をやっていましたから、出してくれ、と随分頼まれました。少しでも早く出たい。今度潜水艦が帰って来たら自分の番だと思っていました。

磯部 出撃すれば当然助からない。上って喜びました。あれ程の喜びは前にも後にも経験していません。

小灘 それが判つての上です。

磯部 死ぬということに対する恐怖感はどうなものだったのでしょうか。

小灘 あの頃は全くありませんでした。色々な人の話に、潜水艦に乗っている回天搭乗員が平然としていて、何時もと変らない生活態度に驚嘆させら

れたとありますが、我々も同様で死ぬことは何とも思わない。それよりどんな事があったても命中して、任務を達成出来るかどうか、つまり自分の死が役に立つかどうかのみが気に懸かっていました。

磯部 指名された直後に覚悟は決まるものですか。

河崎 指名される前からでしょう。兎に角その部隊に入ったことが、既に腹を決めていたからであって……。

磯部 腹を決める時の心境は、国の事情がそうであるからと。

河崎 そんな大それたことは考えていません。俺が何とかするんだと。

磯部 ああ、気負いというか、死生観というか。

河崎 それで俺が死んだら家族は少しは助かるだろう、という考えの方が強いのです。天皇陛下万歳を言ったか言わなかったか判りません。

磯部 私達の現在の心境とは全く違います。時代性でしょうか。

小灘 今は、はっきり客観情勢が違っています。当時は我が国民も国土も破壊に向っていたのですから、そういう情勢下での判断になります。然し、その一言で片付けてしまうのではなく、これから民族の危機という時代が再び来ないとも言えないのですから、今の

人達も当時を知って、その時の対処の仕方を理解する必要があると思います。

あの頃任務達成即生命を喪うことである、と我々は覚悟をしていました。

回天隊員になって、自分が死ななければ我が国は救われないのだと理性で納得しても、体の方は本能的な拒絶反応が出て行けない面があります。

私は着任して二、三日は考えましたが、やがて落着いて迷いは無くなりました。

何がその要素かというところ、「此の身を弾丸に代えなければ日本は救われない。民族と国土を護る手段はもう之以外には無い」ということです。大袈裟に聞こえますが、護るものは自分の親兄弟に始まって日本人全体へと広がります。それが自分自身に対する一番の説得力でした。

河崎 と同時に戦艦、一番大きなものと差違えて三千人を殺せるのは、此の俺の力であると。

磯部 単純に算術的に費用対効果という見方に頭が向いてしまうのですね。俺一人で三千人を押さえる。誰か仲間が又一人三千人を押さえる。そういうことの連続で国は護れると。

小灘 そういうことです。日本人を護る為には相手の人間というより、戦力を殺がないと防ぎ止められない。はっきり言えば、日本の国民を殺しに来る

3千人ですからね。

回天製造の遅れ

小灘 話は変わりますが、海軍の上層部が回天をさっぱり造ってくれなかった。具体的に言いますと、昭和19年8月1日に回天100基生産の至上命令が出ました。処が期限内に何とただの一基も出来上りませんでした。こういう恐るべき怠慢がありました。

河崎 8月中に造れということですが。

小灘 米国の大艦隊がレイテに来る前に回天が準備出来ていれば、集結した所へ突入して撃滅することが出来た筈です。それを色々な責任ある立場の人が真剣にやらなかったと思うのです。

磯部 技術的には可能だった？

小灘 はい、設計図は出来てました。

河崎 試作として3基造られ試験は終わっていました。使えるとして制式兵器として採用されていたのです。

小灘 黒木さんたちが強引に頼んで19年2月に試作命令が出て、3基造られています。7月に審査が終って8月1日に出た100基製造の至上命令を、戦艦大和を建造した呉工廠がまともに受け止めて、その気になればほんと造れた筈です。技術者も問題は無いと言っていたそうです。それでいて造らなかつた。

磯部 結局人が乗って行く特攻兵器

であるということに難色を示したのですか。

小灘 技術者は内心で気運れを感じていたのでしょうね。命令だから造るべきなのにその気にならなかった面もあると思われれます。

磯部 人が乗って帰って来ないというところに、恐らく上層部も可成り躊躇したのでしょうかね。

河崎 いや、もうその時にはそうとも言い切れないのではないかと。というのは、回天I型に関してはそういう状況だったので、同じ8月にもっと大型のII型、IV型の生産命令が出ていたのです。

磯部 上の方からですか。

小灘 そこに一つ間違いがあったと思います。

河崎 設計も何も全部新しいII型、IV型の方に取掛ってしまつた。

小灘 命令で回天I型を100基造れと出ていましたが、まずかつたのは同時にII型、IV型という、より高性能のものを開発せよという命令も出たので、技術者の関心がそっちに移ってしまつたと思われれます。新規に造るより93式魚雷を改造したI型なら簡単に出来るのですから、命令通りI型を先ず100基造つてその上でやれば良かったのです。

更に細かいことを言いますと、命令

を完全に遂行するシステムを作らないで、極く一部の技術者と工員に対してI型を造れと命じて言い放しにしてしまった。だから命じられた連中は精一杯努力したのですが、成果は微々たるもので、大部分の努力が新規のII型に集中してしまつたのです。極めて大事な時に判断の誤りがありました。

之等の事に呉工廠のみでなく、関与していた六艦隊とか第一特別基地隊がきちんと見ていけば良いのに、放置した無責任は許せないと思います。遅くなつては特攻隊員の死が活きません。

海龍・蛟龍

磯部 回天を特攻に使うという思想的なものは終始一貫していましたか。

小灘 回天は採用が決つてからは方針変更は無かつたと思います。採用には相当抵抗がありました。部内で「決

死は良いが、必死はいかん」と蹴られて、黒木さん、仁科さんが18年秋から運動を始めましたが採り上げられませんでした。客観情勢が悪くなつて、19年2月にやっと試作命令が出ましたが、それも公式手続きを経た上での承認ではなかつた様です。4、5月になつて漸く上層部も特攻をやらねばならぬという気運になつて来ました。それ迄に声が無かつた訳ではないのですが、相手にされませんでした。

磯部 海龍とか蛟龍というものもありましたね。回天はその後に出て来たものですか。

河崎 前は特潜で、真珠湾に行ったものです。その後に出て行ったのも二人乗りの段階に留って行つたのも二人乗りの段階に参加したのが黒木さん達なのですが、航続距離を伸ばす、大型化する等は、黒木さんが関与した頃から始つています。そういう事も黒木さん達はやつた上で、これでも駄目だということでも回天に変わりました。

磯部 回天が早い時期にそういう構想で生まれ乍ら、後になつて特攻兵器ではない海龍や蛟龍が生まれて来たということ、特攻兵器ということに問題があつたのでしょうか。

小灘 たしかに問題にする人がありました。

磯部 出来ることなら必死ではなく、生還する確率がある方に努力を傾注する様になつたのでしょうか。

小灘 そういう考え方は相当ありました。特攻を志願する人もいました。前からあつた特潜の部隊は一回限りの戦法を拒否しました。今でもその思想的隔絶はあります。言い度くはありませんが、黒木さんたちは心情的に排除されたと思います。

磯部 特攻に切替えるべきではない

という見解の相違ですね。

河崎 黒木さんは、一旦は血判状まで作って仲間としてやっていたのですが、特潜の人達はいく迄反覆攻撃だと主張する様になりました。

磯部 特攻ということに何か一つあった。

小灘 こだわりがあったのですね。

同じ部隊ですから、呉の向いの倉橋島で同じ海面を訓練に使うことになりませんが、「此の近くでやって貰っては困る」とはじき出されました。回天は後発、特潜は本家ですから。それもあって大津島へ移りました。

磯部 ああ成る程。そうであり乍ら最終的には特攻兵器が見直されたというか、神風のような結論に流れて行ったのですか、それとも最後迄回天は特殊な扱いを受けたのですか。

河崎 第一特別基地隊で、特潜部隊と回天部隊に分かれて、特潜は小豆島から呉を中心として訓練し、回天の方は内海西部を使ってやるという形になりました。でも長官は同一人物で、将官旗は初めは蛟龍の方に掲げられていました。後には光の回天基地に移りました。

磯部 戦局が回天の方に傾いたからですか。

河崎 特潜、蛟龍の場合は例えば比

島、沖縄迄前進しなければならぬのに、その前進が出来ない。自力航行という事になってしまったから。載せるにしても潜水艦に一隻しか載せられない。5人乗りの大きい蛟龍では、潜水艦には載せられません。50屯もありますからね。

磯部 イ号、ロ号、ハ号という流れの中で何で小さな潜水艦、而も自己発電する一般的な潜水艦の機能を持った小型潜水艦の方に走ったのでしょうか。搬送装置は無い、自力で行けない。一寸中途半端な感じを受けます。

河崎 開戦大分前ですが母艦を一つ造りました。それには12隻特潜が積めます。艦隊決戦場迄行って、其処で特潜をバラ播いて補助艦艇として攻撃させる考えです。

小灘 終り頃の考えは局地防衛。日本の沿岸を護るには数が要る。又小さくても使えるから小型を沢山造るといふことで、蛟龍の大量製造に踏切りました。そういう観点からすると、大型のイ400型を造ったのは戦局の先行きを見誤ったもので、もっと早い時にパナマ運河を攻撃するならそれも良かったでしょうが。

磯部 開戦時にはそういう構想はありましたね。

小灘 開戦直後の着想でああった

海底空母群を計画しましたが、敗戦になった頃には殆んど意味は無かったでしょう。

磯部 大きいだけに却って邪魔になる。

小灘 あの資材で蛟龍なりを沢山造った方が良かったでしょう。見通しを間違えた例ではないかと思えます。

磯部 潜水艦もそうですが、嘗ての艦隊決戦時に小型潜水艦を使うという構想はユニークではありましたね。

小灘 そうですね。

回天の戦果

磯部 回天は結局の処何回位実戦に出撃してどの位の戦果を挙げましたか。

小灘 全部で10隊、潜水艦は16隻使って延べ32回の作戦をやっています。潜水艦だけに限定しますとその位になります。戦果は未だにはっきりしていません。米国の戦史のいづれもが書いているのは最初の攻撃で、ミシシネワという艦隊随伴タンカーを沈めたのと、アンダーヒルという駆逐艦を沈めた2件のみです。他に色々な戦記を読んでもみると、沈没、損傷共4隻で計8隻というもの等あります。之以上であることは間違いないと思っています。只調べがつきません。

磯部 出撃された方は亡くなられて居られますから、飛行機の様に誰が何

機墜したという様な記録は残りませんからね。

小灘 潜水艦から出撃した場合、潜水艦自身はずっと見ている訳に行きません。終り頃には無理しても戦果を確認しろということになって、潜望鏡を高く上げた俣で回天の攻撃を見ていたことはありました。然し敵が近ければ制圧を受けますから潜没した俣でいました。

磯部 回天を放したらその俣潜水艦は帰って来てしまう。

河崎 聴音だけでしよう。

小灘 爆発音を聞いても戦果を挙げたか否か、又どんな艦艇を沈めたのか判らない場合が多いのです。我々も調べていますが、米国に照会しても中々返事が貰えません。TV報道を見ると歴大な資料が一ヶ所に集積されている様ですが、調べる係が僅かなものから、頼んでも中々返事が来ません。河崎 終り頃には可成り船団攻撃をやっています。輸送船団に。処が米軍は輸送船に関しては、軍の船に非ずと知らぬ顔をしています。

磯部 記録は一つも残っていないのですか。

小灘 船団に対する戦果を調べるには、どの船団のどの船と言わないと駄目です。調べようが無い。船の数が膨

大ですから。

磯部 回天搭乗員で亡くなった方の記録が残っていますか。

小灘 こちらから出撃した者ははっきり判っています。

磯部 それが命中したか、沈んだのかは判らない訳ですね。

小灘 最近やっと個々の戦闘状況が判る様になりました。例えば第2陣の金剛隊で、パラオの北にあるコツソル水道の泊地攻撃をした回天があります。その時は2基発進して一切不明だったのが、極く最近、米軍小型艦船の記録が出て来て、泊地内に侵入して交戦した事実が判明しました。大型艦を狙ったのですが、途中でLSTと交戦して自爆したか、或は敵弾命中かで目的は達成出来ませんでした。

然し、極めて通過困難な狭水道を進入し交戦した事実が、やっと判明しました。色々な戦記物を調べてそれが間違いないのかどうか、航海日誌を取寄せたり少しでも手掛りのあった船に質問状を出していますが、何処からも返事が中々来ない状況です。

河崎 軍部はよく過大な戦果を発表したと言われますが、回天に関しては20年3月25日の菊水隊と金剛隊の戦果発表以外には、一般に全く発表されていません。内部資料としては出ていま

す。神潮特別攻撃隊として発表され、当時回天という名は世に出ていません。名前が出たのは戦後です。

磯部 秘密兵器だったのですね。

河崎 部内名称は回天でしたが、むしろ〇六と言われていました。

磯部 〇六と言いますと……。

河崎 秘密兵器の開発番号です。

小灘 我々も初めは〇六という名称でしか呼んでいませんでした。可成り経ってから回天の名が使われる様になりました。

米軍の恐怖感

石本 特攻機が米軍に多大な心理的影響を与えたと言われていますが、回天の場合秘密で米軍は気付いていたのでしょうか。

小灘 最初の攻撃の時に判ってしまいました。心理的效果が特に大きかった様です。

河崎 終戦時、軍使がマニラに飛んだ時、先づ米軍は潜水艦で回天を積んでいるのは何隻かと尋ね、直ちにそれらに帰投命令を出せと言った状態ですから、大した戦果を挙げていなかったらそこ迄は言わなかったと思います。

小灘 飛行機は接近が事前に判りますが、回天は判りません。彼等に非常な恐怖感を与えたと言われています。第95機動部隊のオルデンドルフ中将も、

「戦争を継続して行く上で、回天が最大の脅威になっていった」、もっとはっきり言えば、「回天以外に怖いものは無かった」という言い方をしています。

それと私は最後は八丈島に居ましたが、米艦隊が10月末にやって来て、海軍の司令が連絡に行ったら、向うは「近寄るな」と制止して、甲板の上から「回天はどうしているか」と聞いて来たので、司令は機転を利かして「信管を外して動けなくしてある」と答え、それなら上って来いということで、司令はやっと乗艦を許されて交渉に入りました。実際は、回天は何時でも動く状態にしてあったのです。

翌日、向うは艦長以下殆ど士官全員で回天を見に来たので、それぞれに説明しました。回天に対しては非常に鄭重な態度でした。連中の話から米海軍が回天を相当に恐れていたことは事実の様です。回天の戦果について尋ねましたが「一切発表を禁止されている」と何も答えませんでした。

八丈島配備

磯部 八丈島で終戦を迎えられたのですか。出撃待機をして居られたのですか。

小灘 そうです。陸上からも回天を発進させる配備をしていました。本土が戦場になりそうだったので沖繩に行ったのが第1回天隊、之は島に着く

直前に向うの潜水艦に沈められました。第2回天隊が私達で20年5月に出て行きました。横須賀鎮守府としては、硫黄島の次は八丈島に来るであろうと徹底した戦備をしていました。

我々は米軍が八丈島にやって来たら、艦砲射撃をする敵艦を真先に攻撃するのが任務でしたが、終戦迄到来なくて生き残りました。初めに回天に指名された同期生は14人で、生残ったのは私一人です。

磯部 後の方は。

小灘 全員戦死しました。

磯部 突撃して……。

小灘 そうです。私も潜水艦で出て行く筈だったのが、急に横須賀鎮守府から回天を寄越してくれと言われて、八丈島配備になりましたので結果的に私一人生き残りました。暫くして回天に来た3名中2名死にましたから、兵学校72期で回天に来た同期生では、私を含めて2人だけが生き残りました。

話が变りますが、回天隊は上の者から、兵学校出身者から出撃して行きました。戦後は「兵学校出身者は出て行かないで殴ってばかりいた。予備士官ばかり苦労した」などと言う人がいますが、事実は逆です。指揮官先頭を回天隊は実践していました。

終戦直後

河崎 終戦となり錯乱状態でした。

磯部 突然目標が無くなりましたからね。

河崎 どうしたら良いか判らない。

拳銃を射出して空に向けて乱射したり、何とか気持ちを抑えました。16日になっても海軍総隊からは何の指令もない。国際法によって敵が来たら攻撃出来るのだと言われて、生返った様な気持ちになりました。

磯部 徐々に戦争は終わったと。

河崎 その続きがあつて、16日の晩うちの派遣隊で震洋隊の情況が判って来ました。山名ですか死にました。

磯部 それは自爆だったのですか。

河崎 いや事故です。

磯部 震洋というモーターボートの特攻ですね。

河崎 そうです。自動車エンジンで

すから、調子が悪いのでプラグを外してカチカチやっていたら、漏れたガソリンに引火したのです。16日に国際法

云々の話を聞いた後で敵接近の情報が入り、震洋隊は出撃準備ということになり、火薬を搭載してました。火が消えたので安心して帰った後に過熱で誘爆し、25隻中23隻やられました。その時我々も6時間即時待機の命令を受けていました。合法だということで準

備していました。解除になったのは翌

17日でしたが、一度そういう山があつて段々に収束して行きました。

磯部 それ迄死に向つて全力疾走していたのに一度にプツンと切れたのは、自己規制が大変だったですね。

河崎 だから特攻隊の連中は何を仕出かすか判らないから、真先に帰せとなりました。

磯部 元に戻る迄の心の整理といえますか。

河崎 一寸出来ませんでした。私はその後復員輸送と、瀬戸内海の掃海をやつて抑えて来ました。

磯部 緊張の中に自分を入れることで……。特攻生残りの方でヒロポン中毒になつて、可成り打ちひしがれた方も居られたみたいですね。

河崎 ヒロポンは戦前から有りまして。

磯部 特攻の時ヒロポンを打つたという裏話を聞きました。

小灘 そういう人も居たでしょう。潜水艦でも見張り用に配給しました。

河崎 眠らない様にね。

小灘 存在は知っていましたが我々は戦時中使つたことはありません。戦後流行りましたね。

磯部 その頃ヒロポンは氾濫していたでしょう。それで予科練の方が暴れ

たという話を聞きました。心の整理がつかなかったのでしょうか。

小灘 酒を飲むのと似た心境だったのではありませんか。

河崎 ヒロポンの怖いのは直ぐ習慣化することで、初め10錠であったのが直ぐ1瓶2瓶飲まないと効かぬ様になります。

磯部 そこ迄心が傷つけられていたということですね。

現在の心境

磯部 今となつて生残つた方と亡くなつた方と、その辺の心境は如何なものでしょうか。

小灘 我々は仲間と当時暗い話題を話し合った覚えが全くありません。生や死をどう思うとか、そんな話は出たことがなく、楽しい話、笑い声ばかり

でした。出撃して行く時も「やあ」位で別に感情は動きません。自分も僅かな日数の差で出撃するのだから、お互い同じ状況ということで気楽に見送りました。

戦後の今もそういう一体感の様な気持ちが残っています。然し彼等が世間に知られず理解もされないでは、純粹な気持ちで生命を捧げた連中が可愛相です。何と此の世に名前を残さねばと思ひます。

彼等が何をやったか、どういう考え

で生命を捧げたかを、後世の人の記憶に留められる様に遺して行かなければという、生きている者の義務というか、責任を感じています。

河崎 その形にしたのが今靖国神社にある回天の実物です。あれは米軍が戦利品としてハワイに運び、倉庫に放置されていたのを我々が発見して、一切の費用を出し合つて持ち帰つたものです。具体的展示物でこうだったと言える様にして行きたいのです。

小灘 そういう費用は仲間と呼掛け募金し、運搬費用その他総べてを負担してやらねばなりません。元の仲間が大勢応じてくれて、大体必要額の倍位は何時も集まります。共通の想いがお互に残っています。

磯部 戦時中の心境は戦後もずっと続くのですか。一種の天上界へ行かれた訳ですね。それが又下界に戻つて来る。差迫つた死の危険から逃れたという時の気持ちは如何でした。

小灘 「逃れた」という気持ちはありません。今の世の中は昔の俣に生きようとしたらうまく行かないでしょうが、心の一隅にあの頃の気持は残して良いと思ひます。

河崎 10年、20年は夢に出て来ます。復員輸送をやつて一度横須賀に入つたことがあります。米軍艦を見て、此

の態勢なら今日を眠っていてもぶつかるなと思いました。

磯部 そういう訓練を受けて居られましたからね。

河崎 そんなことはしょっちゅうありました。

小灘 人生の短い期間でしたがそれが抜けないのです。

河崎 たった1年です。回天があった期間は、昭和19年9月から20年8月まで、丸1年です。

磯部 その間一つの目標に向って全精力を注入されたからですね。死ぬ為にそれに集中されたのですから。

小灘 強い印象が今でも残っています。お互いその様です。当時の仲間の臨終に、身内の方からの連絡で馳付けたことが何回かあります。本人が常々そう言っていたのか、身内の方が気を利かせたのか、それだけ当時の連帯感が強いということでしょう。

河崎 私の仲間が忘年会後車にはねられて病院に担ぎ込まれ、土曜で医者不在で放置され、20日間意識が回復しなかったのですが、回復し出すと軍隊当時のことばかり口走ったそうです。段々良くなって、彼は現在も健在です。
磯部 それだけ印象が強かったということですね。

戦後教育の誤り

小灘 よく女性の方から「回天が敵を攻撃すると人を殺すことになる。それを何とも思わなかったのか」と責められます。その度にあつと驚き、呆れます。向うは日本人を殺しに来る敵兵なのに。

磯部 そういう相対関係が判っていないからそう思ってしまう。

小灘 女性達の抗議は「日本人はいくら殺されても構わない。米兵を殺そうとするとは何事か」と言っていることなのです。その時の状況が判っていない。こちらとしては何人殺すという意識は毛頭無くて、敵艦を沈めたいだけですが、米兵が上陸して来れば日本人が殺されるからやらざるを得ない。

磯部 日本の国が滅亡するかどうかという瀬戸際的情況にあることが判らない。
小灘 それが明らかな時ですから、我々は命を捨てざるを得なかったのに「アメリカ人を殺そうとしたのか」という言い方をされて……。

磯部 その局面が見えていない。
小灘 そうです。
磯部 大和民族が亡びるかどうかという大前提が見えていない。結局そういう思想の持主が非武装中立論を唱える訳です。「武器を持っているから攻

めて来るのであって、武器を持っていないければ攻めて来ない」という。

小灘 その通りで、言葉の表面で思考が止まっている人が多いと思います。

磯部 そうでしょうね。艦艇見学者の中でもそういうことを言われる方が居られます。そういう方には時間をかけて徹底的に理論を聞かせます。そうすると最終的に喧嘩の理論ですかと言われる。正しくそうなのです。自分がやらねばやられるのです。そこでこういう装備をして命をかけてやっているもので、現実そういうことが無いなら誰もこんなことはしませんよ、と申し上げています。

小灘 誰もが善人ならばそうですが、現実には泥棒も人殺しもいる。
磯部 特に日本人の場合、国防問題が学校教育に入っていませんから、そういう意識を持ってしまつて、喧嘩の理論が判っていません。

小灘 戦後教育の大きな誤りだと思います。
河崎 「敵は良かった、日本は悪かった」です。

磯部 日本は侵略者と決めつけ、何故そうせざるを得なかったかという歴史を学んではいません。この間も中学生が来月から米国留学に行く。米国からの留学生が日本の海軍を見たいと言っ

ている、と電話をして来たのでどうぞと言いました。

米留学生は之が日本のデストロイヤーだと判るのに、日本の男子中学生は、おじさん、この船は何処の国の船ですかと質問する始末です。海上自衛隊の船だよと言ったら、海上自衛隊というのは米国ですかと聞いて来ます。全然感覚が違っています。

之は日本の船ですよ。君達のお父さんの税金で造られたのです。それで日本を護っている。日本に悪さしようとする国が現われたら、我々は駄目だと相手をはねつけるのだと。そういう目的でこの船は造られたのだと話す、へえー知りませんでしたと言つのです。今はそういう時代なのです。

軍艦ですから秘密もあり余り見せ度くはなかったのですが、最近土日、祝祭日は基地を解放して誰でも船を見学出来る様になっています。国民に実態を知って貰うことが先決と割切っています。開かれた自衛隊という目標を掲げてやっています。

母親達も良く来てくれる様になりました。初めは固く身構えています。お前達は悪なのだ、お前達が居るから誰かがちよっかいを出すのだという意識です。全く愕然とします。男性はその点理解ある人が多い様です。

今言って置きたいこと

磯部 戦後日本は平和が続き経済復興を遂げましたが、はっきり言って今世紀末云々と言われる位乱れています。この現状をどうお感じですか。今の若者をこんなものと思われませんか。それとも、かくあるべしと。

小灘 この俣では日本は駄目だと思います。あつてはならぬ姿と思います。教育が悪いと思いますが、戦後の日教組に育てられたのが今の大人ですから。我々は如何に在るべきかを考えさせる歴史教育がされていないことが、荒唐に結びついていると思います。是正は大変ですが、この俣では良い方向に戻らないと思います。

磯部 私は思うのですが、日本に一時期こういうことがあつた、こういう風に個人を犠牲にして祖国を護つたのだということ、何等かの形で後世に遺して行かないと風化しますから。今の様に個人主義が行き過ぎると国家意識が希薄になるでしょうし、濠州辺りでは各地からの移民で成立しているのでも、それぞれの民族が固つてそれぞれで、それぞれの民族を掲げているので、それだけ濠州国民としての意識は薄いらしい、という話を聞いたことがあります。そういうのと比較すれば、日本は一つの民族としての意識は強い筈です。

小灘 重ねて認識して貰い度いことは、特攻は無駄に命を捨てたのではなくて、隊員は自分の一つしかない大事な命を捨てることで、多くの命が救われることを願って自らを捧げたのです。それが今の人に認識されていません。然し、こういうことは世の中が變つても大事な発想であると思います。

キリスト は死んだり復活したりして多くの人の命を救おうとしました。そういう思想を否定して自分の事しか考えない人ばかりになっては、世の中うまく動いて行かないでしょう。そういう意味で人の為に命を捨てた人々がいたことも、是非とも認識し続けて欲しいと思います。

平素 こういうことを話す機会が少ないのですが、日本のマスコミに言っても相手にされません。

石本 魚雷をホーミングした方が命中率が高いということは、何処の国でも思い付くことでしようが、それを実際に乗せることで実用化を推進し、又、それに身を投じて行くということをやった。その事を日本人の良い国民性という言葉で片付けて良いのかどうか判りませんが、一つの時代だけでなく、民族というか国民性として、現在そういう発想は無いのですが、矢張りそれは大切なことであるということ、

お話を聞かせて載いて良く判り感激致しました。

小灘 その通りだと思います。日本人は平素そういうことが表われなくても、皆で助け合つて行こうという気持ち、今でも日本人の心の中に残っていると思います。日本人の非常に良い資質ではないでしょうか。恐らく大抵の外国人はそういう発想をしないでしょう。世の為に遺しておき度い日本人の美徳と思います。

石本 本を読みますと、時代背景がこうだという説明が先づあつて、こういことがあつたと述べられています。今日のお話を伺つて、そうではなくて一人々々が実際に意思決定をして行くことが、決して押し付けられた時代背景というものではなく、人間としての在り方、うまく表現出来ませんがそういう中で、全体として回天の様なことが行われたのだということが良く判りました。

小灘 それは私にとつても大変嬉しいことです。本当にその通りであると思います。一人一人が考えてどうあるべきかの結論を出すことは、戦時中ではもそうであつたし、これからもそうあるべきであつて、人から言われた通り、人のする通りに流されていけば良いというのではないと思います。

今日は逆に良い御意見を聞かせて戴いて、むしろ私の方からお礼を申し上げなければなりません。有難うございました。

磯部 皆さん国のことを考えていらした、凄いいことですね。

田中 結局の処、軍隊教育が良かったのではなく小学校教育が良かったのです。教育勅語が基本にあつて、昔の師範学校は兵営と同じ様なものでした。居室毎に銃が置かれていました。県に一つか二つ設置されていて、その卒業生が皆小学校の先生になりました。

磯部 教育思想がしっかりしていた。**田中** 国定教科書で、木口小平とか佐久間艇長の話が教材として取上げられていました。

磯部 軍神と言われた様な方々の話が沢山載せられていたでしょうし。

田中 時代が違つてしまつた。根本は教育にあると思います。昔の国定教科書はお国の為に命を捧げた人の話が載つており、唱歌でも橘中佐や広瀬中佐が詠はれていました。今次大戦にはこのような教材は無数にあるのに、従軍慰安婦や南京虐殺の虚構を書きたてる教科書業者や文部大臣以下文部省の役人共は見向きもしません。このことはまた別の機会に論じたいと思います。今日はこれまでと致します。

建国記念の日

奉祝中央式典

—皇記二千六百五十九年—

主催 日本を建国を祝う会
会場 明治神宮会館

本年も2月11日13時から行われた。参加者約一五〇〇人。筑波大学竹本忠雄名誉教授の記念講演、天皇陛下御即位十年奉祝記念映画の上映があつて、その後次の決議文が朗読採択された。

決議

ここに、平成十一年、皇記二千六百五十九年の建国記念の日を迎えるにあ

たり、我々は、神武創業のいにしえを偲び、その御偉業に心からの感謝を捧げるものである。

本年は、天皇陛下が御即位されてより満十年の慶賀すべき年に当たると。この十年を顧みる時、国の独立と名誉を損ないかねない事態が相次ぎ、政治・経済の混乱や教育の荒廃、そして幾多の大規模災害も生起し、我が国を取り巻く内外の諸情勢は混乱の度合いを増している。

天皇陛下におかせられては、かかる国難とも言える時代を、ひたすら国運の進展と国民の幸福、世界の平和に御心を砕かれてきた。

天皇陛下は、硫黄島や沖縄など、先の大戦における激戦地を行幸され、戦

没者に対する慰霊のご姿勢を貫き通された。また、阪神淡路大地震などの自然災害にさいしては、国民の奉仕の心や連帯の尊さに触れられ被災者を励まされた。さらに、外国御訪問では、各

国との友好親善に努められるとともに、世界に誇りうる日本の姿をお示しになられた。

我々は、天皇陛下の御聖徳に、神武天皇から百二十五代連綿として続いて来た我が国の皇室の高貴なる道統を拝し、ここから感謝の誠と敬慕の念を捧げるものである。

我々は今こそ、皇室を中心として歩み発展して来た悠久の歴史に思いを致し、現下日本の危機的状況に対処し、この御即位十年を機として、誇り高き日本をめざす国づくりの立ち上がるべき時としなければならぬ。

ここに我々は、政府主催による建国記念の日奉祝行事の実現を強く要望するとともに、全国において御即位十年をお祝い申し上げる国民運動を展開し、もって日本の再建へ向け一致団結して邁進することを誓うものである。

本日、「建国記念の日奉祝中央式典」に際し、右、決議する。

平成十一年二月十一日
日本の建国を祝う会

建国記念の日奉祝中央式典

(日本書紀) 我東に征きしより、茲に六年となりぬ。皇神の威を頼りて、凶徒就戮されぬ。辺土未だ清まらず、余妖尚梗しといへども、中州之地また風塵なし。誠によく皇都を恢廓め、大柱を規擧るべし。而して今、運此の屯蒙にあひ、民の心朴素なり。巢にすみ穴にすむ習俗、これ常となれり。それ大人の制を立つ義、かならず時に随う。苟くも民に利有らば、何ぞ聖の造に妨はむ。また當に山林を披き掃ひ、宮室を經營りて、恭みて宝位に臨み、以て元元を鎮むべし。上はすなはち乾霊の国を授けたまう徳に答へ、下はすなはち皇孫の正を養ひたまふ心を弘めむ。然して後に六合をかねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と為むこと、また可からずや。かの敵傍山の東南檣原の地を觀れば、蓋し國の境逼か。治るべし。

我が肇國の歴史 何ぞ壯嚴なる

世界に誇るこの傳承を、自虐史觀に洗脳された徒輩は否定する。民主主義として政府は社会の風潮を傍観しているだけではならぬ。宜しく政府主催の建国奉祝行事を行うべきである。そして神武肇國の大理想を知悉させねばならぬ。このままでは國の前途憂いに堪へない



神武天皇



特攻勇士之像完成

兼ねて協会の事業として計画していた靖国神社境内にこの像を建てること
が実現し、3月23日に瀬島会長以下69
名が参集、神社側からは湯沢宮司以下
の出席を得て除幕式を行った。設置場
所は遊就館玄関に向かって右の植込み
の中である。

この像は文化勲章受賞者北村西望師
作の原型に基き、日本芸術院会員北村
治禧氏の監修により、日展会員石黒光
二氏が製作したものである。

特攻像は何を見給うや

よしや身は千々に散るとも来る春に
また咲き出でん靖国の宮

(義烈空挺隊関三郎軍曹)

英霊たちの声

その真実の響き

会員 長澤政輝

凛々しい特攻勇士像が建った。しか
も原型は巨匠北村西望氏というのだけ
ら嬉しい。

もちろんこの像は、あらゆる兵科、
あらゆる戦場で散華された英霊への顕
彰のシンボルとして、永く愛されて
ゆくだろう。

そういっては悪いが、大村益次郎ど
のでは私たち世代の実感として少し遠
過ぎたし、今となっては、あの須田町
の広瀬中佐像などを戦犯美術と断罪し
て毀したりせず、せめて靖国の境内に
移されていたらと、惜しまれてならな
い。当代の名手が、心魂を捧げつくし

仰ぎみる特攻像

決意こめた眉宇
悠揚迫らぬ容姿
愛しき親兄弟を護る為
後に続く者を信じて
征ししをのこ
ここに鎮まる

た美しい文化財であったのだから。

ともあれこのたびの特攻勇士之像建
立は、誇りに満ち、憾みに充ちた今世
紀日本の掉尾を飾る「特攻隊戦没者慰
霊平和祈念協会」陸海共同の快挙とい
える。

かつて私が直接お会いした特攻勇士
といえ、仙幼先輩の山本卓美中尉
(のち二階級特進)である。母校へお
別れに見えた束の間の邂逅であったが、
のちに遺詠がとどく。

わが後に続かん者のあまたあれば
永久に揺るがじ大和島根は

しみじみと拝誦し、自分も何と見
られるような辞世を遺して後に統こう
と感奮興起させられたものである。

戦後私は、出版物や記念館でなおた
くさんの遺書や遺詠に接し、若武者た
ちの立派な文学的素養に感心するばか
りだ。

かような日本人の美学は、遠く「万
葉集」防人の歌「今日よりは顧みなく
て大君のー」などから連続とつながり、
ことに昭和に入ってから「支那事変短歌」
以後は実戦のなから歴大な佳作を生
む。短歌のみか俳句漢詩現代詩を含む
一億総詩人的感性が、極限の状況下に
まるで火のごとく、花のごとく燃え咲
き、大きな結実を見せたのである。

さらに、特攻勇士たちの魂を揺さぶ
る遺詠のかずかず、それは単に感興の
吐露だけでなく、国民精神を鼓舞し、
ひいては一身を抛ってでも真の平和を
護ろうという、全人類へ送る永遠のメッ
セージとなり、世界文学史上まさに空
前絶後の金字塔を築き上げた。

このみずみずしくも、高遠な創作の
活力は、いったいどこから生まれてき
たか。

「文武両輪」或いは「経文緯武」のこ
とばがある。当時、全国どの武校に
おいても、穏やかな「文」の教科が重
視され、優れた教官が配されて情操の
陶冶が図られた。私たち幼年校の国語
教程にも「武人の雅懐」という一章が
あり、もののふの嗜みと不断の修養に
ついてまず叩きこまれた。いわば「武」
のヨコ糸に「文」のタテ糸をもって整
齊と、もののふの全人格が織られてい
たのである。

最近「俳人協会」の冊子に「陸軍幼年学校における俳句教育（執木龍）」という一文があり、しみじみ昔の授業を思い出した。

各学年一章の俳句鑑賞は、作例としてごく親しまれている芭蕉、蕪村、一茶らの古典俳句を採り、勇ましい戦争俳句ごときは、別冊として与えられた「作文読本」に辛うじて少数の名句を列示する。たとえば、

わが島根寒月照りて侵し得ず

誓子

真珠湾年逝く濤に霊とどむ

蛇笏

櫻咲く若き生命のとこしえに

かな女

神の名の九柱に浪沓ゆるなり

麦丘人

俳句のみか、短歌についても、教程の編纂や指導方針がまったく同じなのは、編者たちの見識あるゆえんだ。

こういう教育から若武者たちの淨らかな遺詠は生まれたが、いっぽう前線の将士たちはそれぞれ銃後の肉親を思い遣り、かつ激戦の実相に身を曝しながら、息詰まるような気魄で戦争を詠み上げている。

戦争短歌は、当時の新聞や出版社、歌人協会などが相次いで歌集として発行したが、選考に当たった斎藤茂吉な

どはその質量に驚き、これまでにないすべて「真実の響き」があるものばかりだと絶賛している。

兵士の歌は、背囊に「万葉集」や「芭蕉七部集」を潜ませ、或いは塹壕で物理書を読むなどの光景さえ捉え、また敵の少年兵や姑娘兵への同情や哀惜、愛馬へ餞けの悼歌まであって、闘志と同居するヒューマニズムの暖かさにはつい目がしらが熱くなる。

さきの山本卓美中尉などは、曹洞禅に打ち込み経典「修証義」を心底に、生死を超越せられての見事な突入であった。

これらの日本民族の類まれな美質を、ぜひ何らかのネットにのせ、平和を希求する世界中の良識に訴えかけたいものだ。

山本卓美中尉

（編者挿入）

勳皇隊隊長 19年12月7日オルモツク湾の敵艦に突入

（日記より）

皇国ノ無窮ヲ信ジ

大東亜戦必勝ヲ信ジ

後ニ続く者ヲ信ズ

とこしへに守らざらめやうるはしき

吾が日の本の 大和島根を

七たびも生れ替りて護らばや

わが大君のしらす御空を

遺族探しに御協力お願い

ルソン島作戦に参加した米軍兵士クレイトン・リアマンさんはクラーク飛行場付近で「白貝一人」と註記のある雑のうを拾った。中にはそれぞれ別人の遺品と思われる七枚の写真が入っていて、一枚だけが威八三五七部隊尾崎発二という名前が書いてあった。リアマンさんは一昨年病没したが、生前これらの写真を遺族に返し度いと言っていたので、娘のバーバラさんは遺族探しを知り合いの日本大学大谷利勝教授に依頼した。大谷教授は八方手段を尽し氏名の判っている写真は奈良県五條市近内町に住む尾崎正憲さんの弟であることを突き留めた。バーバラさんに知らせたところ、早速アラスカから来日し、昨年11月27日五条市に行き兄正憲さんに発二さんの写真を手渡し、地元の新聞に大きく掲載された。

ところがそれ以外の写真については全く手がかりがない。私（田中）と大谷教授とは旧知の間柄なので、相談を受けた。この部隊は第99飛行場大隊で、大隊長は少候20期の由井与助大尉。同期生名簿によれば一昨年逝去されたことまで私は調べ、由井さんの遺族に電話で話してみたが、何の手がかりも得られなかった。停年名簿等の資料によ

り、この大隊の将校は、少候21期八巻茂、24期北沢貞男（戦死）、特別志願員我定という人々の名前まで調べたが、手がかりになる情報は得ていない。

第99飛行場大隊（威八三五七）に在隊した人で現存者がおられたら私宛にお知らせ願いたい。なお写真の中には、子供の写っているものが三枚あり、うち二枚は姉と妹らしい。他の一枚には裏に甘利晃男、昭和十八年十一月〇日満一ヶ月と書いてある。

これらの写真を見つめていると、是非とも遺族にお返ししたいと思う。
〒274-0823 船橋市二宮2-5-15
電話 ○四七465〇九五四

田中賢一



忘れがたい人たち

回天①

小灘 利春

柿崎 実

経歴…山形県、海兵72期。昭19年9月回天搭乗員となり、12月金剛隊伊56潜水艦で出撃して以来、都度発進の機に恵まれず、出撃と帰還を繰り返したが、四度目の出撃でようやく会心の突撃を果たし、散華した。

柿崎中尉は航空母艦の瑞鶴に乗組中、海軍潜水学校学生を発令されたが、そのまま私どもと共に回天搭乗員に転じ、

昭19年9月より最初の人間魚雷訓練基地、大津島において訓練を進め、回天特別攻撃隊の第二陣金剛隊の伊号第56潜水艦の先任回天搭乗員として19年12月21日に、ホーランドディアに向かった。

潜水艦は敵艦隊泊地へ繰り返し接近を試みたが、警戒嚴重のため発進地点にまで進入できず、遂に引き返した。

彼は秋田県酒田中学の出身であり、温厚で無口、ボソツとして感情をあまり顔に出さない、いかにも東北人らしい人物であった。基地出撃の前夜は、

他の同期生たちと同様、彼も宿舎で遅くまでかかって数通の遺書を私の横で書きしたため、翌朝潜水艦に乗り込み

出撃していったのであるが、互いに僅かな日数の差で次々と還らぬ出発をする身であるから悲愴な感慨はなく、送る私は平然と「しっかり」と言っただけである。

そして彼は、陽の目を見ない潜水艦でのニューギニア往復44日間もの遠征を終えて還って来たときも、黙って部屋に入ってきて、たちまち以前の生活に戻った。同期の回天隊員の間柄ならば、この明るく穏やかな雰囲気は当然のものどおり私たちは思っているから、いっつもどおりの彼の心のうちまで、推し量る必要はなかった。

しかし彼は、長い航海ののち、帰投した最初の内地、呉軍港の宿で居合わせた級友と酒を飲み、ひとり声もなく泣いていたと、戦後になって聞いたときは、愕然とした。

無念ではあったろうが、任務を果たせず戻ってきたことは些かも本人の所為ではない。だが何であるうとも、歓呼の聲に送られて華やかな出撃をしながら、皆の期待に応え得なかった。身の不運を嘆くとともに、そのことを理屈抜きに恥ずかしいと考えたのではなからうか。

続いて彼は、神武隊の伊号第36潜水艦で20年3月2日出撃、硫黄島水域に赴いたものの、作戦中止となった。折

り返し3月28日、出撃した多々良隊の伊号第47潜水艦は沖繩近海に向かったが、敵駆逐艦と交戦、損傷を被って、またまた引き返した。

そして、洋上の航行艦襲撃に攻撃目標を転換した天武隊の伊号第47潜水艦に4月20日、彼は満開の桜の枝を抱いて再び乗りこみ、壮途に就いた。5月2日駆逐艦群に護衛された敵輸送船団に遭遇、ようやく発進の好機をつかみ潜水艦を離れて突撃、21分後に命中の大爆発音を潜水艦が聴いた。その聴音の方向から大型駆逐艦1隻を轟沈、と判定されている。

艇の故障や会敵の機会がなかったため戻ってくる搭乗員が時折あったが、基本的にはひとたび出撃すれば還ってこないのが回天の搭乗員である。それを更に四度もの出撃を繰り返したのち、

ようやく念願の任務を果たすことが出来たのであるが、淡々として表情を変えることのない穏やかな彼も、我々の感覚を超えて心中、秘かに苦しむことがあったのかと、彼の奮戦ぶりを称賛する一面、今更ながらに哀惜の念を深めるものである。

彼はまた、多くの短歌、漢詩を人知れず残していた。その辞世と思われるもののひとつは

野菊咲くわが日の本をいでたちて
我は征き征く 南のはてに



筑紫丸船上における金剛隊
前列左から六人目柿崎中尉

三枝直

略歴 山梨県、甲13期予科練出身の回天搭乗員。第一特別基地隊大津島分遣隊所屬。回天特別攻撃隊金剛隊伊58潜にてグアム島アブラ港の敵艦船に突入、戦死。少尉。

昭和19年9月21日、甲種第13期飛行予科練習生出身で回天の下士官搭乗員となる最初の百名が大津島に着任した。土浦航空隊で多くの志願者から選ばれたこの百名の中から、最初の出撃搭乗員として回天特攻第二陣の金剛隊に選ばれたのは、北海道出身の森稔二飛曹と山梨県出身の三枝直二飛曹であった。

(17) 三枝兵曹は甲府中学の、既に五年生でありながら「未曾有の国難に命を惜しむべきにあらず」と学年集会で訴え、率先して募集に応じ「予科練」に入り、さらに「救国の新兵器の要員」を血書して志願し、着任してきたものである。紅顔の、優しい感じの美少年であり、頭脳明晰且つ積極的、研究熱心であった。軍艦の編隊運動のひとつで、針路を変えずに航路を左右にずらす「偏位運動」の講義を私がすると、すぐに自分の搭乗訓練でこの手法を活用し、徳山湾の入口で見事な航跡を描いてこの

偏位運動をやってくれた。勿論、狭水道の真ん中を潜航したまま通過して行った。

敵の泊地の入り口に防潜網が展張されている場合、これを突破する方法について私に相談に来て、二人で真剣に対策を考え合ったことも、今は胸の痛む思い出となっている。

二人は金剛隊伊号第58潜水艦で、石川誠三中尉(兵72期)、工藤義彦中尉(予備三期)と一緒に昭和19年12月30日、大津島基地を出撃してグアム島アブラ港の在泊艦船の攻撃に向かった。突入決行の1月12日未明、アブラ港に接近中の伊58の艦橋で、いよいよ乗艇するとき、三枝二飛曹は突然「艦長、南十字星はどれですか」と訊ねた。

「もう少ししたら東南の空に美しく出てくるよ」と答えた艦長は、決然挙手の礼をする二人に「成功を祈ります」と一人ずつ手を握り見送った。

敵前、しかも最後の突撃を前にしての純真さ、落ち着きぶりは、送り出す潜水艦の乗員のほうが感動するほどであったという。その情景が今も目の前にちらつく、と艦長橋本以行少佐は述懐しておられる。橋本艦隊は後に、日本に投下する原爆をテニアンまで輸送した重巡洋艦「インディアナポリス」を撃沈する殊勲を挙げられた。

グアム島攻撃の回天の戦果は、戦中の「改装空母が轟沈した」との海外報道に始まって時おり話が出ている。終戦直後の米軍士官の話では「カサブランカ型の空母一隻と大型油送船三隻が轟沈し、少数の乗員しか助からなかった」と伝えられている。

米軍は「何事もなかった」と発表しているが、伊58は黒煙二条が天に沖するのを望見しているので、何もなかった筈はないであろう。この回天四基の追跡調査は我々に残された重い課題の一つとなっている。

感状

回天特別攻撃隊金剛隊
伊號第三十六潜水艦伊號第四十七潜水艦
伊號第四十八潜水艦伊號第五十三潜水艦
伊號第五十四潜水艦及伊號第五十八潜水艦
ヲ以テ編成セル回天特別攻撃隊金剛隊
隊、敵艦隊ヲ中郡太平洋方面ニシテ
ギニア北岸及アトミラールイ諸島
方面前進根拠地在泊中、好機ヲ捕捉
シテ奇襲スル目的ヲ以テ各方面分隊
隱密進出シ大部潜水艦ハ昭和二十一年
一月十一日一部潜水艦ハ二月二十一日各方面前進
根拠地ニ敵艦隊ヲ奇襲シ回天ヲ以テ
必中體當リ攻撃ヲ以テ多大ノ戦果ヲ擧
ゲテリ
右ハ爾後ノ作戦ニ奇襲スル所極メテ大ニ
其ノ功績顯著ナリト認ム
昭和二十一年二月十一日
聯合艦隊司令長官 小田島武

階級特進の栄を受けて海軍少尉に任せられ、金鷄勳章功四級を授与された。三枝少尉の厳父は33回忌にあたり彼の鎮魂を願って観音像を建立された。また、少尉が書き残した句に厳父が下の句を加えられたが、同期の甲飛13期会がこれを刻んだ歌碑を建てて観音像に添えた。

散る時ぞ 美しかりし 桜花
また 咲き出でむ ふるさとの庭



伊58艦上で訓示を受ける金剛隊
向かって右の方に三枝二飛曹がいる

川崎順二

鹿児島県、海軍機関学校53期、第一特別基地隊大津島分遣隊、回天特別攻撃隊千早隊伊368搭載回天5基の先任塔乗員として硫黄島水域の敵艦船攻撃に向かい、昭和20年2月26日交戦戦死。

川崎順二少佐は海軍潜水学校機関科学生を卒業後、志願して昭和19年9月1日に開隊した回天部隊に着任、最初の時期の塔乗員となった。「大津島の基地で兵学校出の士官がよく殴った」と言い立てる向きがあるが、無責任な誇張である。「特攻隊だから当然殺気立っているだろう」と誤解させるだけに悪質である。気迫に満ちた部隊であるから、鉄拳制裁が時にはあったが、行うのは大部分が機関学校出身者であり、またその殆どは「川崎順二」とされている。

海軍機関学校は元來気性の激しいところであるが、その歴史上最も殴ったクラスは彼の53期と言われ、その中でも川崎が随一との定評がある。それにもかかわらず、殴られた下級生の間に彼を怨む声がないのである。烈しく叱咤し殴っても、良くしようとの誠意からの制裁であって一切の私心がなく、

それが下の者によく判るからだと言う。個人的な感情はないから、カラッとして後に残らない。

彼は一面、良く気がつき、人に親切で、面倒見がよかった。古くからいた予備士官たちも「川崎中尉はむしろ気安い仲間の感じで、猛烈人間といった印象ではなかった」と語る。

ともかく、回天の訓練基地、大津島の中では最も勇ましい存在であったことはたしかであり、特に同じ隊で出撃する学徒出身の、海上経験が少ない少尉たちは、いつも身近にいただけに大変であったと推察される。だが、苛烈な戦局に立ち向かう能力を、切磋琢磨をもって短期間に錬成しなければならぬとの思いは、当時の軍人として理解できる。

回天の塔乗員は、波濤の中をたった一人で操縦し、どうあっても命中しなければならぬ。ここで断ち切る自分の人生が、世の役に立って終わるか、為すことなく終わるか、最後の突撃の成否がその分かれ道なのである。特攻は「死ねばよい」のではない。

彼は薩摩隼人の土性骨の太さで急速戦力化の先頭に立ち、機関学校流の短兵急な手法ではあるが、周囲を叱咤鞭勵して勇往邁進した。軍人の評価は、「殴ったから駄目」といった小児教育

の水準で決めてはならない。もっと大事な要素がある筈と考える。

昭和20年2月、米軍の大機動部隊が硫黄島に、攻略部隊を満載した船団を伴って来攻、迎え撃つ日本海軍の戦力は特攻機と潜水艦だけであった。米軍は2月19日上陸を開始、急遽潜水艦伊368、伊370、伊44の三隻をもって回天特別攻撃隊千早隊が編成され、川崎中尉は回天五基を搭載する伊号第368潜水艦の先任塔乗員として2月20日、大津島基地を出撃し戦場に急行、そのまま消息を絶った。

公報では2月26日戦死とされ二階級特進しているが、戦後調査した米軍の記録では2月27日未明、同潜水艦は護衛空母アンジオの搭載機に捕捉され潜航したが、執拗な追跡、攻撃が続き、遂に硫黄島西方24哩の地点で沈んだ。

この交戦の際、甲板上に回天の姿はなかったと聞く。即ち、既に回天が発進した後であった可能性があり、硫黄島守備隊からも洋上に火柱多数を見たとの報告が来ていた。交戦機の詳しい報告や周囲艦船の記録の入手に努めているが、熱血の人川崎順二少佐を偲ぶとき、残された者として隊員たちの戦いぶりを明らかにせずにはおれない思いである。



基地における伊368の千早隊員
左先頭が川崎中尉

回天隊員の回想次号に続く

青年勉強会における講話

我が協会の会員である松本武仁、中江仁等愛国の士は、靖国彩管奉仕会と称する組織を作り、年に四〇回ほど靖国神社境内に御祭神にまつわる絵を展示している。このことは既にこの会報で紹介したが、本年は絵の展示を通じて掌握した若い人達を対象に、毎月一回勉強会を開き、主題をきめて講話を行っている。この二編は私共（田中、吉武）が依頼を受け、一月と二月の席上話したことの全文である。

日本軍が精神的に卓越していたのは何に據るのか

田中賢一

一、卓越していたことの実証を 特攻隊員にみる

特攻という絶対に死ぬことを前提とした戦法を採ったことの統帥上の可否は別とし、当時の若い軍人はよくこれに応えて立ち上った。特攻を正式の戦法として初めて採用したのは、比島作戦における海軍の第一航空艦隊司令長官大西瀧治郎である。彼はこの作戦でこれ以外に勝つ見込みはないと確信し、特攻戦法の採用に踏み切ったのであるが、一航艦の若い戦士が必ずやっ

れるという確信があったから、この戦法を採用する決心がついたのである。よく特攻隊員は志願によってきめたのか命令によるのかと、詮索する向きがあるが、少くとも出撃は命令によるもので、そのような戦法が採用できたということが、日本軍が精神的に卓越していたことの実証である。

薩摩半島にある知覧は、沖縄作戦における陸軍航空の最大の特攻基地であり、その記念館には遺書や写真等多数展示されており、また出撃前の逸話も多く語り伝えられている。それらを見ると、迫り来る国難を救うのは自分達以外にはない、愛する肉親を守る為に死ぬのだということが随所に現れている。自分は若くて死ぬが、お母さんはその分だけ長生きしてくれ、という遺言はよく見かける。勝又勝雄少尉（特操二期）は世話になった富屋食堂の鳥浜トメさんに「おばちゃん、ぼくの残りの命をあげるから長生きして下さいよ」と言ひ残して出て行った。また宮川三郎軍曹（仙台乗員養成所出身）は、ホタルになって帰ってくるとトメさんに言ったが、本当にその晩ホタルが飛んできたと、言い伝えられている。このように心残りの片隅に現世があったにしても、それに打克つ任務に対する強い意志があった。

義烈空挺隊は、私の身近かな存在だった。この部隊について驚嘆に価するのは、はじめサイパン攻撃の特攻隊に指定されて準備し、それが取止めになつてからも特攻隊として訓練し、最後は沖縄の敵航空基地に突入散華したのであるが、その間約半年、一名も欠けることなく、健軍飛行場を発進している。サイパンを狙った頃は、B 29の帝都空襲を目のあたりに見て、燃えるような敵愾心が心の支えとなっていたのであらうが、沖縄作戦も山場を越した五月中旬ともなると、しかも航空特攻の脇役的任務に就くとなると、心の頼りどころはどこにあったのだらうか。その答はこの人達の書き残したものや言い残した言葉によって明瞭である。後に続く者が必ずある。後に続け、自分達の死が後継者をふるい立たせるのだと信じていた。日本民族の永遠の生命の中に個人の生死は埋没していたのだ。

さて、ここに日本軍の精神が卓越していたことの一端を、特攻隊員に代表してもらったのであるが、以下歴史的にみて、その據ってきたものは那辺にあったか、考究してみたい。

二、学校教育

〔義務教育〕

明治以来先人の努力によって、我が

国の義務教育の普及率は世界に冠たるものがあつた。明治5年8月学制が制定され、小学校令が公布された。小学校令はその後何回か改正され、昭和16年の国民学校と改称されたが、その学校令の第一条には次の通り謳っている。「国民学校ハ皇國ノ道ニ則リ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ目的トス」この考えは明治の初から一貫しており、これが成文化された義務教育の準據となつていた。明治23年になつて教育勅語が發布され、国民道徳の據りどころを示され、終戦まで教育、特に義務教育の根本理念とされた。祝日等小学校の式典には校長が全校職員、児童に読み聞かせていた。

教育勅語の訓えるところを要約すれば、先ず教育の淵源は忠と孝に在るとし、次の九個の徳目を掲げている。即ち父母に孝、兄弟に友、夫婦相和、朋友相信、恭儉己を持、博愛衆に及し、学を修め業を習い知能を啓発し徳器を成就す、公益を広め世務を開く、国憲を重んじ国法に従う、そしてそれらを締め括って一旦緩急あれば義勇奉公以て天壤無窮の皇運を扶翼すべしと訓えている。満六才になり小学校に入り、この勅語の文面は理解できなくても、訓え諭されることは追々身に浸み込んでいった。これは教育に任ずる小学校

訓導に対する訓えでもあった。

当時の教科書は全部国定教科書であり、その中には忠勇な将兵の話は沢山載っていた。その二三の例を示せば、死んでも喇叭を口から離さなかった喇叭手の話、それは「喇叭の響」と題し小学唱歌にも歌われていた。日清戦争の初、大島混成旅団に属する歩兵第21

聯隊は、朝鮮の成徳に進出した敵に対し、前面の安城河を渡って攻撃したのであるが、このとき第12中隊の喇叭手木口小平は進軍喇叭を吹いていたが、敵弾が喉を貫いてもかすかに吹きしきり、倒れても喇叭を口から離さなかったという話である。

もう一つ例を示せば、明治43年海軍の潜水艇が広島湾で訓練中に海底に沈み浮上しなかった。後日引揚げてみると、佐久間艇長以下全員が持場を離れず死んでいた。そして佐久間艇長が薄暗いあかりの下で書き残した遺書の全文が教科書に掲載されていて、読む児童達に強い感銘を与えた。

また、次のような小学唱歌もあった
 厩炉裏のはたに縄なう父は
 過ぎしいくさの手柄を語る

居並ぶ子供はねむさ忘れて
 耳を傾けこぶしを握る

厩炉裏火はとろとろ

外は吹雪

古きよき時代と見過ごしてしまいうけては済まない。水師營の会見も、橋中佐も、広瀬中佐も小学唱歌の教科書にあった。このような忠勇なる将兵の話なら今次大戦に無盡蔵だが、従軍慰安婦を書きたてる教科書業者は、そんなことに見向きもせず、文部大臣以下もこれに同調している。

〔教員養成〕

昔の小学校訓導は殆んどが師範学校出身者だった。師範学校は県立で授業料は不要、全寮制で起居容儀は軍隊と同様だった。そこで徹底した教育を受けた者が県下の小学校で教鞭を執る。勿論日教組などはない。小学校は市町村立であるが、教員は県に一つか二つある師範学校出で占めているので、先に述べた教育勅語を根底におく国民教育が行われた。軍隊に入ってくる壮丁の大半は小学校だけを出ていたので、兵士の精強の根源に師範学校があったと言っても過言ではない。

〔中等・高等教育〕

当時中等学校以上の学校へ進学する者は、明治28年42%、大正7年15%、昭和15年25%となっている。これらの学校に於ける教育で見逃してならないことは軍事教練と配属将校の存在である。大正14年世にいう宇垣軍縮は四個師団廃止の大改革だった。その前の山

梨軍縮と併せて六千名の将校が不要となったが、うち二千名を定員外として確保し、これを現役のまま中等学校以上の学校に配属将校として派遣することになった。これは画期的な制度であった。それ以前から学校教練は行われていたが、配属将校が制度化されると忠君愛国の精神鼓吹は強化された。生徒や学生は配属将校の行う学校教練の検定に合格しないと、一年志願兵、後に幹部候補生になることができないので、配属将校の権限は大きかった。

中等学校以上が使う教科書は、小学校のように国定ではなかったが、教師が先に述べたような小学校教育を経て成長した人達であるから、教育の方向は自から定まるものがあつた。中にはキリスト教の学校や官立大学等で一部の教授によって逆方向の指導が行われた例もあつたが、それらは世の指弾を浴び、大勢の中に埋没されていた。

〔青年教育〕

小学校を出ただけで上級学校へ進まなかった者の為に青年訓練所、後の青年学校があつた。働きながら学ぶもので、季節的に余暇が得易い農村の方が就学率がよかつた。戦時になってからは適用されなかつたが、青年訓練所を出ている者は、歩兵になると帰休兵という制度があつて、在営一年半で帰郷

できた。また青年訓練所で軍事教練を受けていると、初年兵になって未経験者に先んずることができるので、農村の若者は殆んどが青年訓練所に入った。社会教育の学科を担当するのは村の小学校の古参訓導が兼任するので、小学校高等科の延長のようなものだった。

三、社会的趨勢

〔兵役に対する認識〕

国民皆兵だった当時、兵役は納税、義務教育と並んで、国民の三大義務と言われていた。しかし、兵役は一部の男子だけが負担するものである。従つて実役に就く者だけでなく、壮丁を出した一家もその間働手を取られ大きな負担を強いられた。そこで郷党を代表して国民の義務を果しているのだという意識が世間に徹底していた。それが兵役に就いている当人には自覚となり、郷党の者には感謝の気持となり、留守家族に対する各種の援護となって現れた。農村にあっては留守家族の農作業を手伝うことなどは当然のこととされていた。

入営時の盛大な見送り、除隊帰郷時の歓迎なども壮丁に対する強い影響を与えずには措かなかつた。戦死したとなると郷党挙げて葬儀が行われ、遺族

は名譽を称えられ、尊敬と優遇を受け
た。

〔青少年の社会教育〕

都會と田舎を問わず、どこにも青年
團があり、その幹部は必ず軍隊に於て
よい成績を修めて除隊した者がなり、
団員の先達として特に入営前の青年を
指導した。年少者をもって少年團とし
ている所もあり、これらは皆尚武の精
神を涵養するのに一役買っていた。郷
土に因む諸行事、例えば氏神様の祭典
などには青年團として参画し、郷土愛
を盛り立てたが、これも愛国心に繋る
ものであった。

国の祝祭日になってはいなかったが、
三月十日の陸軍記念日と五月二十七日
の海軍記念日には、小学校でも何らか
の催しが行われたが、青年團もそれに
ふさわしい行事で団員の団結をはかつ
た。また十二月十四日に義士祭を行う
所もあった。これらは皆質実剛健の氣
風を養うとともに、ひいては愛国心の
涵養に役立った。

〔在郷軍人会〕

これは勅令に據る除隊した者の組織
であるが、入営前の者に対しても大き
な影響力を持っていた。また予備役在
郷者は在郷軍人会の会員になっている
ので、現役当時の精神を堅持させるこ
とに役立った。軍隊が拡大すれば構成

員は予備役の比率が大となる。在郷軍
人が召集されて構成した軍隊というこ
とになるので、在郷軍人会の存在意義
は大きなものがあつた。

四、国民精神

それは家庭教育、学校教育、社会全
般から受ける影響によって培われるも
のであるが、人によって濃淡はあるも
の、日本人である以上お国の為に尽
くすという意識は誰しも持っていた。
そのことは生れながらに持っていたと
さえ思える。性善説と同じように、生
れながらに持っているこの精神を失つ
てしまうものがあるとすれば、その後
の教育や社会的影響によるものである。
かつての社会はそれに磨きをかける方
向に働いていた。

武士の家に生れた者は生れながらに
して武士らしく、町家に生れた者は生
れながらにして商人らしいというが、
日本人に生れた者は生れながらにして
日本人らしくある筈だ。それは日本の
歴史がそうさせるのであらう。異なる民
族が混在し絶えず争を繰返している國
幾度か外国の侵略を受け他民族に支配
された國、そのような國や民族は地球
上に枚挙にいとまがない。これに比べ
我が國は、単一民族がこの島國に平和
に暮らしていたという歴史、それを守り

通そうとする氣持が、生れながらの日
本人ということであらうか。

我が國には永年かけて培われた武士
道という道徳律があつた。武士という
階級が消滅して久しく、武士道など陳
腐なものと思つてはならぬ、日本人、
少くとも戦前の日本人にはそれが生き
続けていた。後から述べるが、軍人勅
諭の徳目、あれが武士道にほかならな
い。武士道の余祿としてあのような道
徳が一般社会に浸透していたから、軍
隊に入つて日夜軍人勅諭に則り教育を
受けても、その内容に於て別に目新し
いことは無かつた。

以上累々述べたことは、日本軍の精
銳の據つて来ることのうち、軍隊内以
外の要因について觀察したものである。

五、軍隊教育

以上述べたような一般社会から入っ
てきた壯丁を、軍隊はどのようにして
教育したか。

作戦要務令の綱領には次の一文があ
る。「訓練精到ニシテ必勝ノ信念堅ク
軍紀至嚴ニシテ攻撃精神充溢セル軍隊
ハ能ク物質的威力ヲ凌駕シテ戦捷ヲ完
ウシ得ルモノトス」と謳っている。よ
く旧軍は精神要素のみを重視し物的戦
力を蔑しろにしたとか、技術軽視とか
兵站無視とか批判するが、それは高等

用兵のことであつて、戦闘を実施する
軍隊にあつてはこの綱領の一文は真理
であり、少くとも心構えとしては全く
この通りである。

然らばこのような精神要素はどのよ
うにして涵養されたかというところ、軍隊
教育令の総則には次の通り示されてい
る。

精神要素ノ涵養

第四十二 精神要素ノ涵養ハ教育ノ神
髓ニシテ寤寐ノ間モ忽セニスベカラザ
ルモノナリ故ニ教育ニ任ズル者ハ予メ
企画スルト共ニ凡百ノ機会ト資料トヲ
捕捉シテ之ガ涵養ニ勉ムルヲ要ス

第四十三 勅諭及勅語ハ実ニ精神要素
涵養ノ本源ナリ故に時ト所トヲ論ゼズ
機ニ触レ物ニ応ズル毎ニ聖旨ノ存スル
所ヲ訓諭シ之ヲ腦裡ニ銘刻セシメ以テ
拳々服膺ノ実ヲ現サシムルヲ要ス

第四十四 国体ノ特長就中建軍ノ本義
及皇室ト臣民トノ關係ヲ明カニスルハ
忠君愛國ノ信念ヲ益々鞏固ナラシムル
所以ニシテ又国防ニ関シ的確ニ理解セ
シムルハ己ノ責務ヲ自覚シ弥々奉公ノ
念ヲ堅クセシメ得ルモノトス

第四十五 凡ソ精神要素ノ涵養ハ幹部
ニシテ率先範ヲ垂ルルニアラザレバ其
ノ目的ヲ達シ難シ乃チ幹部ハ百ノ言辭
ハ一ノ垂範ニ如カザルコトヲ銘肝シ絶
エズ修養研鑽ヲ積ミ奮ツテ難局ニ当リ

進ンデ実践ノ範ヲ示シ黙々ノ問部下ヲ薫化シ其ノ景仰ノ中心タルノ域ニ達セザルベカラズ

第四十六 精神要素ノ涵養ハ実地ニ鍛

鍊陶冶スルヲ主眼トス而シテ日常生起

スル有ユル事象ハ一トシテ之ガ機会ナ

ラザルハナシ就中周到適切ニ企画シ整

正嚴格ニ実施スル教練ハ実ニ軍人精神

ヲ鍛鍊シ軍紀ヲ振作スルノ要道ナリ而

シテ諸般ノ演習、内外ノ勤務並ニ行住

坐臥ノ間薫化シテ懈ラザルハ亦之ガ涵

養ニ欠クベカラザルモノトス斯クノ如

クシテ彼此相応ジ表裏兼該シ始メテ能

ク軍人精神竝ニ軍紀ノ涵養ヲ期シ得ル

モノトス

第四十七 訓話ハ精神要素涵養ノ有力

ナル一手段ナリ而シテ訓話資料ノ選択

ニ方リテハ被教育者ノ素質ト心情トニ

適合スル如ク工夫シ訓話ノ実施ニ方リ

テハ能ク其ノ本旨ヲ会得セシムル如ク

平易直截ニ説示シ且勉メテ感激ト印象

トヲ深刻ナラシメ終ニハ鞏固ナル信念

タルニ至ラシムルト共ニ実践躬行ニ依

リ具現得セシムルヲ要ス

第四十八 典令ノ綱領、我が国粹タル

古今ノ史実、光輝アル国軍ノ偉績就中

所屬団隊ノ戦績若クハ先輩、戦友ノ建

テタル勲功等ハ精神要素涵養ノ為重要

シ且躬行ノ規範ヲ与フルコトニ勉ムベ

シ

第四十九 軍人精神ノ涵養ハ実践躬行

セシムルニ始リ之ト説示トヲ反復シテ

聖旨ノ存スル所ニ帰一セシメ更ニ鍛鍊

ヲ加ヘ終ニハ一挙手一投足ノ微ニ至ル

迄軍人タルニ背馳セザルニ至ラシメザ

ルベカラズ

第五十 軍紀涵養ノ為ニハ絶対ニ服従

ヲ実行セシムルト共ニ統率ノ本義特ニ

其ノ尊嚴ナル所以ヲ体得セシメ終ニハ

至誠上長ノ命ヲ奉ジ一令ノ下欣然トシ

テ身命ヲ君国ニ獻グルニ至ラシムルコ

ト緊要ナリ

第五十一 団結心ヲ鞏堅ナラシムル為

ニハ部下ヲシテ光輝アル伝統ノ下克ク

隊長ヲ中心トシテ忠実ニ己ガ分ヲ守リ

上ヲ敬ヒ下ヲ慈シミ左右相親和スル如

ク教導スルト共ニ隊長躬ラ骨肉ノ至情

ヲ以テ孜々トシテ之ヲ指導シ以テ至誠

相信ジ生死相俱ニスルニ至ラシムルコ

ト緊要ナリ

第五十二 内務ヲ著実ニ実行セシメ且

衛戍其ノ他ノ諸勤務ヲ嚴格ニ履行セシ

ムルト共ニ兵器ノ尊重、馬匹ノ愛護及

被服其ノ他諸物品ノ取扱等ニ就キ絶エ

ズ指導訓化スルハ精神ノ修養ヲ完カラ

シ且躬行ノ規範ヲ与フルコトニ勉ムベ

シ

第五十三 集合教育等ノ為ニ一時固有

ノ隸屬ヲ離レタル者ニ対スル教育ニ方

リテハ所屬隊長ト教育者トハ相互ニ緊

密ナル連繫ヲ保持シ其ノ精神要素ノ涵

養ニ遺漏ナカラシムルヲ要ス

第五十四 軍隊教育ノ適否ハ直チニ郷

党閭里ノ風尚ヲ左右シ国民ノ精神ニ至

大ノ影響ヲ及スモノナリ蓋シ軍隊ニ於

テ修得セル無形上ノ資質ハ以テ社会ノ

風潮ヲ向上スベク国民ノ儀表トナリ質

実剛健ノ氣風ヲ馴致シテ国家ノ興隆ヲ

増進シ得ベケレバナリ是ヲ以テ苟モ軍

隊教育ノ任ニ当ル者ハ良兵ヲ養フハ則

チ良民ヲ造ル所以ナルヲ思ヒ国民ノ模

範典型ヲ養成スルノ覚悟ヲモ必要ナリ

トス

これは教育した訳ではないが、戦死

すれば靖国神社に祀られ、天皇陛下の

御親拝を賜るといふことは誰でも信じ

ていた。父に会いたくば靖国神社に來

れとは、遺書で屢々見かける言葉であ

る。同期の桜の歌にもある。離れ離

れに散らうとも、花の都の靖国神社、

庭の梢で咲いて会およ。こんなこと

も精神要素涵養の一助になっていた。

う質問は当然出てくると思う。

作戦要務令の綱領に「戦捷ノ要ハ有

形無形ノ各種戦闘要素ヲ綜合シテ敵ニ

優ル威力ヲ要点ニ集中發揮セシムルニ

在リ」と教えている。勿論これは戦術

部署のことであるが、ここで有形無形

の各種戦闘要素という言葉に注目した

い。本日ノ主題は精神要素のことであ

るから無形の戦闘要素の範疇である。

無形の戦闘要素は技術的な練度と精神

要素で構成されている。

精神要素の涵養の努力について、今

日の自衛隊が昔の軍隊にくらべて劣っ

ているとは思わない。然し個々の構成

員の精神的基盤ともいふべき一般教育、

社会情勢、政治等は往時とは雲泥の差

があり、往時のような卓越した精神要

素を期待できるかという、残念なが

ら否と言はざるを得ない。それならば

無形の戦闘要素について見劣りするか

という、必ずしもそうとは言えぬ。

そこにはもう一つの技術的練度という

問題がある。これらを総合したものが、

無形の戦闘要素となるからである。

これらのことに余り深入りすると今

回の主題から離れるので、この辺まで

と致し度い。

六、結 言

以上述べたのはすべて戦前のごとく

あるが、然らば現在はどうなのかとい

特攻隊と軍人精神について

吉武登志夫

一、大東亜戦争の発起(略)

二、航空の大拡充(略)

三、体当り戦法採用の動き(略)

四、特攻隊の編成

この度特攻隊編成に当たっては陸軍中央部内では編成方法をめぐって激しい論議が行われた。

甲案。特攻戦法を中央が責任をもって計画するため、隊長の権限を明確にし正規の軍隊編制とする。

乙案。特攻要員と器材を第一線兵団に増加配属し、第一線指揮官が臨機に定めた部隊編成とする。

結局論議の末、我国の航空不信を第一線將兵の生命の犠牲によって補う戦法を天皇の名において命令することは不相当と判断され、乙案が採用された。

10月20日米軍のレイテ島進攻により捷一号が発令され連合艦隊のレイテ湾突入は10月25日と定められた。これを支援する航空総攻撃は海軍が23日第一航空艦隊、特攻20機を含む50機、第二航空艦隊200機。を以て行われたが小型機の体当りが艦隊主力より大きい戦果

を挙げ、日本の朝野に絶大な感銘を与えた。

陸軍は24日100機をもって総攻撃を開始しレイテ湾内の敵艦隊に対し成功の感覚であったが攻撃の主力である重軽爆撃機の参加全機を失ったのは手痛い損害であった。

陸軍は軽爆の特攻隊万葉隊を10月20日編成(岩本大尉以下空中勤務者、将校5名、下士官11名、整備13名)。9機をもって22日銚田を出発、26日リパに到着。11月5日軍司令部に申告、連絡のため飛行機一機でマニラに向う途中敵艦載機によりニコラス飛行場附近で撃墜され将校5名全員を失なった。

重爆の富嶽隊は10月24日編成(西尾少佐以下26名、4式重爆9機)され、26日浜松出発28日クラークに進出した。海軍特攻隊の戦果は11月2日大本営から発表され、国民は感激の渦に巻きこまれた。

陸軍中央部は早速小型機による特攻隊6隊の編成を下令し八紘第一―第六隊とした。(比島進出後、八紘・一字・靖国・護国・鉄心・石腸と命名)、計63機である。

さらに11月16日、八紘第七―第十二隊の特攻6ヶ隊を発令(比島進出後、丹心・勤皇・一誠・殉義・皇魂・進襲と命名)計54機である。

各隊は夫々12機編成であるが石腸隊だけは18機の編成となった。各隊の比島進出は簡単ではなかった。遠距離航法の不馴れ、飛行機故障の多発、整備の不如意、各基地への空襲、天候の不良等は南進を著しく遅滞させた。

五、石腸隊の編成と隊員の心境

これからは私の関係した石腸隊について、その行動及び隊員の心境等について述べる。

石腸隊は航空士官学校を卒業し軍偵班として下志津飛行師団の乙種学生を終了したばかりの全員14名を基幹に我々を教育した教官2名(隊長・副隊長)助教2名を加えた18名で編成された師弟部隊であった。

11月5日午後「教官・助教4名を加え18名全員、第4航空軍司令部付(と号要員)を命ず」との命課を受けた。我々は各人が別々になるよりも全員が揃って現戦局の焦点になっている比島第一線の任務につける事を互いに喜び合った。片岡少尉の当日の日記に「16時過ぎ第4航空軍への命課伝達さる。待望の時は来る。淡々たる気持にて出動せん」と、又市原少尉の日記には

「戦局益々最高潮に達し皇国の興廃をこの一挙に決せんとするとき、選ばれてその一戦力となり得るは誠に栄光の

至りにして男子の本懐たり。今に至る二十余年の生涯はこれよりの御奉公へのものなりき。祖国に報ゆるは今。父母兄弟に応ふるは今なり。いざ必ずや期待に添ふべく、全身の努力を以て任務を達成せん。余が後に常に父母、兄弟、恩師あり、同胞あり、刮目して待たれよ。余が微力皇国の危急を救い得るを喜ぶ」と。これ当時全員の偽らざる心境であった。

六、石腸隊の比島進出

11月6日、真新しい飛行機を立川航空廠から受領した(この親心が反って仇に)新品の飛行機の場合、通常ならば4〜5日かけて馴らし運転や試験飛行を行い、その間に十分調整、整備の上出発すべきであるが、6日に飛行機を受領し8日には出発しなければならぬ程戦況が切迫していたのである。

11月8日、八紘第六隊の18機が一斉に銚子飛行場を出発することができず先発、後発の二陣となった。先発は高石隊長以下11名。後発は細田副隊長以下7名、である。これは一刻も早くという切迫した戦況と、飛行機受領状況等の為の已むを得ない措置であった。先発隊11名は参謀総長以下の訓示と見送りを受け銚子飛行場を飛び立った。訓示、激励を受けて我々はその感懐

を次のように日誌に残している。「盛大なる各方面の方々のお見送りを受けて壮途につく。皇国の御為には生もなく死もなし。唯々誠を以て御奉公せんのみ。心中唯清々として何らの曇りなし。決戦眞に皇国の運命を決すべき秋に当り決戦場への発進誠に男子の本懐なり」と。

又「この光栄ある壮途に際会し得る吾人の喜び又何処にか見出し得べきか。後に続く者を信ずと敢然身を挺せし諸先輩の叫びし言葉そのまま帝国の無窮とその隆昌を信じ、予も又神機をかりて南溟に雄飛せんとす。此の機、此の秋、此の壮途に就くを得しめ給へる神靈に対し奉り感激おく能はざるものあり。日本人たるの欣喜に浸りつつ、航空兵将校たるの自負と矜持にいきつつ、決戦場に天駆くるの幸を心より味うものなり。やるべし。義は山岳よりも重く死は鴻毛よりも軽し。予何者をも恐れず只任務未完遂の中道に倒るるをおそるのみ。吾人の信念と吾人の肝を以て必任務達成に猛進せん」と。

梅津参謀総長以下多数の人々の見送りを受け我々は銚子飛行場を離陸、編隊を整えて西南方に向ったが段々天候が悪化、箱根附近から一旦銚子に引き返した。

11月9日10時、銚子を再出発、昨日

とは打って變つて快適な飛行日和であった。箱根を過ぎたあたりから高石隊長機エンジン不調となり、藤枝の海軍飛行場に不時着、点火栓の手入をして出発、途中名古屋あたりから天候悪化してきたが14時過ぎ、加古川に到着。10日、加古川を10時半出発したが、瀬戸内海は視界が悪く、西條附近で編隊ばらばらになり、半数の2コ編隊は一旦加古川に引返し再出発して17時頃新田原に追及した。11日、北九州にB-29の空襲があり、12時過ぎ知覧に向う。途中隊長機エンジン不調の為片岡機、安達機と共に都城飛行場に不時着し15時過ぎ知覧に追及した。また山浦機は離陸直後エンジン不調となり新田原に引き返した。12日、全機の集合を待ち13時知覧を出発、15時過ぎ沖繩大空襲の跡も生々しい伊江島の飛行場に着陸。13日、伊江島を10時出発、12時石垣島に着陸、飛行場大隊に案内され砂糖湯等の接待を受け、横になって疲れをいやす。15時出発、台湾の花蓮港を目指す。途中天候不良のため雲下を高度500米位でスクールの柱を避けながら飛行し、約1時間後に花蓮港北飛行場に到着した。

14日、午前中花蓮港北飛行場から独立飛行第48中隊(軍偵の中隊)の基地

である南飛行場に移動し整備を行う。入念な点検の結果、故障箇所が続出してみつきり夜に至るまで整備を続行した。

15日、13時すぎ台東に向って出発、14日台東に着陸した。片岡機は離陸直後エンジン不調で花蓮港に残留した。

16日、離陸時エンジン不調で花蓮港に残留した片岡機は、徹夜作業により快調となった愛機で、整備関係者の労に深謝しつつ8時頃台東に追及した。全機揃ったところで10時前台東を離陸、比島を目指したがバシー海峡は途中天候が悪く、暗雲低迷しスクールに次ぐスクールで前の編隊を見失い、岡上、大井、吉武の3機でスクールを避けて、時に海面すれすれに、時に何千米と上昇し約1時間悪戦苦闘して飛行を続け、たがバタン島上空附近から好天候となった。12時頃敵機の銃爆撃を受けた跡も生々しいルソン島北西部のラオアッダに着陸した。小憩の後15時半ラオアッダを出発、2時間後クラーク飛行場群の南西にあるデルカルメンに着陸した。ここには2、3日前まで連日敵艦載機が来襲していた。また附近には敵のゲリラが居り一分の隙も許されぬ状況であると戒められた。

17日、午前中休養をとり16時過ぎデルカルメンに隣接する目的地ポラックに移動した。

ポラック飛行場は道路が中を横断しており、一見したところ畑と見誤りかねない飛行場らしくないところであった。着陸の方向や目測に苦労した。

18日、ここに来て初めて500疋爆弾の信管をはずして搭載し離着陸訓練を行った。離着滑走も延び上昇率も悪く、特に着陸目測が大変で降下速度が少ないと沈みが大きく、極めて微妙であり操縦感覚の感得が大切であった。

19日、朝7時頃から敵艦載機の襲撃があったが、幸い当飛行場は襲撃を免れた。9時すぎ第4航空軍司令部に申告のためトラックで出発、途中ゲリラの襲撃により廻り道をして12時頃マニラに到着した。17時頃より軍司令官に申告、訓示をいただきここで改めて「石腸隊」と命名され次の詩を賜った。不動石腸靖皇國 崇高如神将士姿 一身軽然大任重 不怖死亦勿求死 20日、9時頃宿舍航空寮を出発、12時帰隊してみると昨日の空襲で内地より苦心して輸送してきた飛行機を8機焼失、残り3機も被爆していた。早速被爆機の修理と焼失機の補充が大事なということになった。

七、石腸隊の出撃

21日、隊長は急遽軍司令部に事情報

告のため出張。夕刻隊長帰隊され全員を集めて「石腸隊員の闘志は極めて高く、乙種学生訓練では艦船攻撃訓練を十分積み重ねてきており一回限りの体当り攻撃とせず、何回でも思う存分存分決死の攻撃を繰り返して、戦果を最大限に挙げつづける戦法の選択を懇請したが、この意見は航空軍の特攻の趣旨とは違うものである、としてしりぞけられた。命令遵奉、俺が眞先に突入んで模範を示す。」と訓示されて、出撃即全員必死を大悟され集められた8機を直撃しネグロス島に進出、12月5日、片岡・市原・大井・下柳田・山浦・増田各少尉を率いて、スリガオ海峡を西北進中の敵艦船群に突入諸共散華された。

8日、オルモック湾には敵輸送船約30隻、巡洋艦等艦艇およそ30隻がオルモックの南、イビルに上陸作戦を展開したので第4航軍はこれを攻撃するため暗雲たれこめる天候にも拘わらず各戦隊の出動可能機を挙げて出動させた。昨夕前進して来たばかりの伊藤少尉は整備未了の我々を残して、決然、特攻隊としては唯一機これに加わり散華した。

12日、昨夜来の雨がまだ降り続く早朝、石腸隊の井樋、安達、吉武、各少尉、八紘隊、丹心隊各一名は第2飛行師団司令部に集合、レイテ島バイバイ沖には100隻を下らぬ目標があると聞く。7時頃雨も小雨となりいざ出撃。安達機は離陸の際不幸にも浮揚せず、機体損傷のためルソン島に帰還して後日を期す。

吉武機はエンジン不調。辛うじて離陸したが他機より遅れて後を追ううち、グラマン4機につかまり回避中、被弾しセブ島沖のマクタン島に不時着負傷した。石腸隊では井樋少尉1機がバイバイ沖の敵艦船に体当り散華した。井樋少尉の両親に当たった最後の手紙には、「神州不滅、信ずること厚きが故に、祈る心切なるが故に、淡々たる心境にて征きます。我が父は神の父なり。我が母は神の母なり。降る霜の白髪となるも清くおはしませ。」

数ならぬ身にはあれど、日の本の歴史書くてふ、その一しづく。と。12月15日未明、敵の大兵力は我が予想よりも一歩深くミンドロ島西南端サホセ附近に上陸を開始した。大本営は作戦の重点をルソン島の防衛に移した。21日又もミンドロ島に向う大艦船団が発見された。22日、ルソン島ポーラックより石腸隊の安達少尉は殉義隊の2機と共にこの方面の敵艦船に体当り散華した。

昭20年1月5日午後、誠司偵隊の百式偵機がクラーク西方海面から蜿蜒数百軒に亘り空母22隻を含む60余隻の大船団を発見し、最早論議の余地なくリンガエン方面への本格的な上陸企図と判断された。

飛行機の都合でネグロス島に前進できず、苛立たい気持ちでポーラックに待機していた隊員の心境を次のように書き送っている。「遙か急を告ぐる風雲を望みつつ時に臥龍雲を得ず往再後方に永らう。隊長殿を始め七神既に神まかります時に不覚の涙なきにあらず。戦局未だ樂觀を許さず吾人に期待される極めて大なるに翔るべき翼なきを如何せん。されど来る暁には必ずや天晴れの戦果、目に物見せてくれんと存じます。骨だに還らぬ身には恰好の

遺品として小指を斬りて古武士に倣い血書せるを御贈り致します」と。しばらく出撃の機会がなく脾肉の嘆をかこっていた石腸隊員にもその機会がめぐまれた。

1月5日夕刻、石腸隊副隊長細田中尉、林、杉町各少尉は一誠隊3機、進襲隊1機と共にルソン島西海域の敵船団に体当り散華した。

1月6日、敵艦船群は果してリンガエン湾に進入した。石腸隊の岡上少尉は鉄心隊の2機、旭光隊、皇華隊、皇魂隊の各1機と共にリンガエン湾の艦船群に体当り散華した。

7日、リンガエンの敵艦船群は動かなかった。我が特攻攻撃により上陸準備が進まないのである。しかし敵機の飛行場攻撃は益々激しく滑走路に飛行機を運び出す事さえ決死の作業であり、払曉、薄暮のほかは発進できない状況になった。

8日、特攻隊は払曉から攻撃を開始した。石腸隊の上野・鈴木各少尉、時田曹長は皇魂隊3機、一誠隊3機、精華隊3機、進襲隊2機と共に敵艦船に突入散華し石腸隊の最後を飾った。

9日、10日、12日、13日と陸海軍はともに残存全機をもって特攻を敢行した。

我が軍の腹背に迫った事によって重大な局面を迎えた。

八、陸海軍特攻とその後の配備

比島作戦における特攻は海軍333機、420名、陸軍は202機、251名であった。その後起こった沖繩作戦における特攻は、海軍108機、181名、陸軍88機、101名であった。

終戦時の配備は防衛地上部隊は総動員によって240万人を要地に配置し1人10殺の肉弾戦を展開。航空は陸軍一般作戦機100機、特攻機200機（8月末までに300機予定）。海軍は一般作戦機100機、対機動部隊特攻機330機、対攻略部隊特攻機200機、計約1万機を配備、他に桜花を関東一円の地上基地に配備した。航空以外に陸軍の約200隻、海軍の回天、海龍、震洋、伏竜を70余ヶ所に分散配備して9月初めを目標にして本土防衛準備は着々として進められた。

作戦の構想としては、日本海軍は侵攻部隊が日本沿岸に近づいた時、45隻潜水艦を使用して主に輸送船団を狙い同時に空から陸・海協同して集中特攻攻撃を行い、そのあと残った巡洋艦2隻と駆逐艦23隻と更に多数の人間魚雷（回天、蛟竜、海竜）で迎えうち、その後の特攻フロッグマン（伏竜）100名

が続き、上陸した敵に対しては所在の部隊を結集して1人10殺の肉弾戦を展開するといふものであった。日本のこの強烈な抵抗意識は連合国側の安易な

日本々土上陸作戦は連合軍の甚大な損害を生ずると、上陸作戦を躊躇させ、非人道的な原爆投下や互いに牽制し合ったソ連の参戦を促し、無条件に条件をつけたポツダム宣言により始めて日本を降伏にみちびいた。

九、結言

終戦後、我国は連合国側による日本弱体化政策により逐次我が国民の心は蝕まれていった。一身を捨てて祖国を、我が国民を救おうとして散華して逝った戦没諸英霊にさえ「犬死だ」「特攻は無謀で狂気な自殺行為だ」と公言して憚らない輩すらいる。特攻は国家、国民を救うための愛の行動であった。特攻隊員達は「俺が命をなげうつ事によって愛する祖国、愛する同胞、愛する妻子兄弟姉妹、尊敬する父母を護ることができぬなら喜んで死ぬぞ」と覚悟し、後に続く者を信じて散華して逝ったのである。その国を護る責任感と同胞を愛する純粹無垢な魂が特攻を支えた精神である。又戦没諸英霊も同じ気持ちであったらう。

これらの「祖国よ永遠に栄えあれ」と祈って散華した諸英霊に護られて、戦後長きに亘って平和がつづいた。反面自国の安全を他国に委ねる無責任に甘んじ、実利的な物欲を追求し、人々

は英霊のご加護も忘れ、自分さえ良ければよいという利己主義の風潮が蔓延し、日本人古来の心の美しさ、豊かさ、は逐次失われて行ったように思われる。しかしこのような浮薄な人々は世相の表面に現れた一部の輩であって、最近段々と日本の大地の底には皆様のような、或るいは特攻散華の感想文を書いた人々のような、多くの人々の健全な思想が脈々として地下水のように流れているのを感じるのである。どうかこの地下水が日本の大地の表面を潤す時が来る事を切望する次第である。



バゴロドを飛立つ石腸隊

図書紹介

吉武登志夫著(協会会員)
生残り特攻隊員の手記

長い日々 (頒布価格) 一、〇〇〇円

石腸隊員吉武登志夫少尉は、昭和19年12月12日九九式襲撃機に50キロ爆弾を抱き、ネグロス島バゴロドを発進しレイテ島西方洋上に向った。ところがセブ島上空でグラマン数機の攻撃を受け頭部に重傷を負い、辛じてマグタン島に不時着した。そこには海軍航空部隊がいたので助け出され一命をとりとめ、その後セブ島―ルソン島―台湾と空輸され、特攻出撃の機会を窺ったが果さず、終戦に至った。

石腸隊一八名のうち一七名は特攻散華したので、これらの人々の精神を後世に伝えるため、此の度この本を執筆上梓された。本書の頒布を我が協会が行っている。会員必読の書物と信ずるので、協会事務局宛て御注文下さい。尚、右書籍のほか、
「特別攻撃隊」 三、八〇〇円
「ビデオ」(第一御糖隊、義烈隊) 五、〇〇〇円
「特攻絵ハガキ」八枚一組 四〇〇円
も扱っています。

平成10年度事業報告

平成10年度事業計画に基づき以下のとおり事業を行った。

1. 慰霊事業

(1) 陸海軍特攻隊戦没者合同慰霊祭

平成10年4月3日、靖國神社において陸海軍特攻隊戦没者合同慰霊祭を挙行政した。参列者は政財界要人来賓74名、遺族60名、会員290名、併せて424名であった。

慰霊祭終了後、私学会館において当協会の年次総会を開催した。

(2) 世田谷山観音寺・特攻平和観音年次法要

平成10年9月23日、世田谷山観音寺において、同寺が主催する第47回年次法要に協賛した。当日は来賓40名、遺族60名、会員255名、合計355名の参列があった。

(3) 全国各地慰霊事業への協賛

- | | | |
|---------------|-------------------|----------|
| 1. 宮崎特攻慰霊祭 | 4月5日(最上理事長参列) | 宮崎・宮崎市 |
| 2. 都城慰霊祭 | 4月6日(同上) | 宮崎・都城市 |
| 3. 万世特攻慰霊祭 | 4月12日(田中賢一評議員参列) | 鹿児島・加世田市 |
| 4. 荒鷲奉賛会慰霊祭 | 4月11日(最上理事長参列) | 埼玉・熊谷市 |
| 5. 知覧特攻慰霊祭 | 5月3日(同上) | 鹿児島・知覧町 |
| 6. 殉国の碑慰霊祭 | 5月9日(同上) | 長崎・川棚町 |
| 7. 特潜会慰霊祭 | 5月16日(同上) | 広島・呉市 |
| 8. 興亜観音例祭 | 5月18日(同上) | 静岡・熱海市 |
| 9. 宝塚遺徳顕彰会慰霊祭 | 7月4日(同上) | 兵庫・宝塚市 |
| 10. 楠公回天社慰霊祭 | 9月6日(小灘利春評議員参列) | 岐阜・下呂町 |
| 11. 明野慰霊祭 | 10月22日(深川 巖評議員参列) | 三重・明野町 |
| 12. 伊良湖岬慰霊祭 | 11月2日(最上理事長参列) | 愛知・伊良湖町 |

13. その他

予科練雄飛会慰霊祭、航空碑奉賛同人会碑前祭、震洋会慰霊祭、船舶特幹1期生会慰霊祭、水戸つばさの塔慰霊祭、少飛会慰霊祭、中攻会慰霊祭、ラバウル航空隊慰霊祭、第1御盾隊慰霊祭等に協賛した。

2. 慰霊像建立事業

靖國神社の許可を得、建立地が決定されたのを受け、本年5月8日特攻像建立委員会を発足せしめ、数次にわたる委員会を開催した。

その結果、平成11年3月下旬完成を目途に事業を推進した。

3. その他の事業

(1) 機関誌『特攻』34, 35, 36, 37各号を発行し会員その他に配布した。

(2) 特攻烈士遺詠集刊行事業

本年1月29日、委員会を発足せしめ、概ね月1回の委員会を開催し、遺詠作者768名、1466首を纏め平成11年内に刊行を予定している。

(3) 『特別攻撃隊』の頒布

本年度頒布 79冊 本年度末在庫 181冊

(4) PR用 絵葉書・ビデオの頒布

1. 絵葉書 本年度頒布 1248組 本年度末在庫 3868組

2. ビデオ 本年度頒布 108巻 本年度末在庫 5巻

以上

収 支 計 算 書

平成10年1月1日から平成10年12月31日まで

(第6年度)

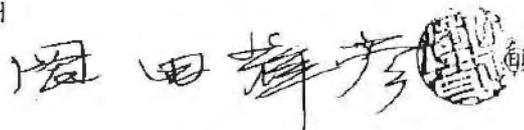
(単位:円)

| 科 目 | 予算額 | 決算額 | 差 異 | 備 考 |
|--------------------|------------|------------|------------|-----|
| I 収入の部 | | | | |
| 1 年会費収入 | 5,200,000 | 4,958,070 | 241,930 | |
| 2 基本財産運用利息収入 | 9,580,000 | 9,785,531 | △205,531 | |
| 3 特別会費収入 | 5,000,000 | 5,208,570 | △208,570 | |
| 4 寄附金収入 | 3,000,000 | 1,499,200 | 1,500,800 | |
| 5 懇親会費収入 | 1,400,000 | 1,527,000 | △127,000 | |
| 6 出版事業収入 | 2,600,000 | 1,124,740 | 1,475,260 | |
| 7 雑収入 | 20,000 | 44,699 | △24,699 | |
| 当期収入合計 (A) | 26,800,000 | 24,147,810 | 2,652,190 | |
| 前期繰越収支差額 | 11,800,000 | 12,226,798 | △426,798 | |
| 収入合計 (B) | 38,600,000 | 36,374,608 | 2,225,392 | |
| II 支出の部 | | | | |
| I 管理費 | | | | |
| 人件費 | 4,750,000 | 4,739,111 | 10,889 | |
| 旅費交通費 | 100,000 | 106,430 | △6,430 | |
| 通信費 | 150,000 | 177,271 | △27,271 | |
| 会議費 | 400,000 | 406,422 | △6,422 | |
| 事務所経費 | 660,000 | 660,000 | 0 | |
| 消耗品雑費 | 650,000 | 905,252 | △255,252 | |
| 什器備品購入支出 | 300,000 | 211,869 | 88,131 | |
| 租税公課 | 70,000 | 70,000 | 0 | |
| 予備費 | △150,000 | 0 | 0 | |
| 2 事業費 | | | | |
| 慰霊祭等事業費 | 6,000,000 | 6,291,481 | △291,481 | |
| 特攻隊史実調査研究費 | 200,000 | 0 | 200,000 | |
| 特攻隊資料収集費 | 100,000 | 0 | 100,000 | |
| 出版事業費 | 4,500,000 | 3,055,224 | 1,444,776 | |
| 予備費 | 500,000 | 0 | 500,000 | |
| 当期支出合計 (C) | 18,380,000 | 16,623,060 | 1,756,940 | |
| 当期収支差額 (A) - (C) | 8,420,000 | 7,524,750 | 895,250 | |
| 基本財産繰入額 | 10,000,000 | 0 | 10,000,000 | |
| 支出合計 (D) | 28,380,000 | 16,623,060 | 11,756,940 | |
| 次期繰越収支差額 (B) - (D) | 10,220,000 | 19,751,548 | △9,531,548 | |

觀特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会の平成10年度の計算書類について監査した結果、適正であつたことを認めます。

平成11年2月24日

監事



監事

